秋田県文化財調査報告書第490集

船　戸　遺　跡

―一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―

２０１４・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

船戸遺跡

―一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―

２０１４・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、高速交通体系やアクセス道、国道等の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に先だって、平成24年度に実施した船戸遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、中世の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡、火葬施設等の遺構や、陶磁器、木製品、石製品等の遺物が発見され、中世の集落の様相が明らかとなりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり御協力をいただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会等関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年３月

秋田県教育委員会

教育長　米田　進

例　　言

1　本書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に伴い、平成24年度に発掘調査した船戸遺跡の発掘調査報告書である。また、同事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の５冊目である。

2　調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。

3　船戸遺跡（ふなといせき）の所在地は、秋田県大仙市北楢岡字船戸482外である。遺跡略番号は７ＨＴである。

4　発掘調査の原因は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所が所轄する一般国道13号神宮寺バイパス建設事業である。

5　発掘調査は、秋田県教育委員会が国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所から調査の依頼を受けて、秋田県埋蔵文化財センターが平成24年度に実施した。調査期間・調査面積・調査主体者・調査担当者・総務担当者は以下のとおりである。

調 査 期 間　　平成24年５月14日～８月10日
調 査 面 積　　6,850㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　栗澤光男（秋田県埋蔵文化財センター調査班　副主幹）
　　加藤　竜（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主任）
　　田村瑞保（秋田県埋蔵文化財センター調査班　調査・研究員）
総務担当者　　柴田真希（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）
　　小松正典（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）

6　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の１『大曲〔平成５年要部修正〕（高速自動車道）』・『刈和野〔平成20年修正〕』、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1,000分の１工事路線計画図に基づく。

7　遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

8　本書に使用した空中写真は、2001（平成13）年、1975（昭和50）年国土地理院によるものを財団法人日本地図センターより購入したものである。

9　第４章の「理化学的分析」は、株式会社加速器分析研究所、株式会社吉田生物研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析を委託した成果報告である。

10　出土した木製品の一部は、株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。

11　本書の執筆・編集は、栗澤光男が行った。

12　発掘調査では、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会の協力を得た。

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＢ・・・・掘立柱建物跡　　ＳＩ・・・・竪穴建物跡　　ＳＡ・・・柱穴列

ＳＥ・・・・井戸跡　　ＳＯ・・・・かまど状遺構　　ＳＮ・・・焼土遺構

ＳＫ・・・・土坑　　ＳＫＣ・・・火葬施設　　ＳＤ・・・溝跡

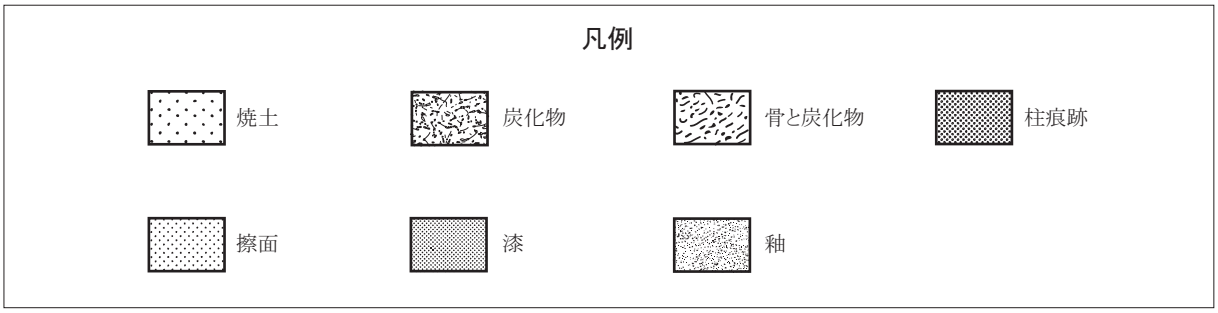
ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

2　調査区の基本層位にはローマ数字を、遺構の堆積土には算用数字を使用した。

3　挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず通し番号を付した。

4　土器の拓影配置は、表裏を採拓した場合は、断面の左側に裏面、右側に表面を配置した。表面だけ採拓した場合は、断面の左側に配置した。

5　挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。



目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 2
　第３節　整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　調査の方法と成果 …… 10
　第１節　調査の方法 …… 10
　第２節　基本層序 …… 10
　第３節　検出遺構と遺物 …… 14
第４章　理化学的分析 …… 95
　第１節　船戸遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）（平成24年度委託分）…… 95
　第２節　船戸遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）（平成25年度委託分）…… 98
　第３節　船戸遺跡出土炭化材の樹種（平成24年度委託分）…… 101
　第４節　船戸遺跡出土炭化材の樹種（平成25年度委託分）…… 103
　第５節　船戸遺跡出土漆製品の塗膜構造調査 …… 106
　第６節　船戸遺跡出土木製品の樹種調査結果 …… 108
　第７節　船戸遺跡出土種実と骨の同定結果 …… 110
第５章　総括 …… 123
図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　路線と遺跡 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　地形分類図 …… 5
第４図　船戸遺跡(34)と周辺遺跡位置図 …… 7
第５図　調査区とグリッド配置図 …… 11
第６図　Ａ・Ｂ区基本層序範囲図 …… 12
第７図　調査区基本層序図 …… 13
第８図　遺構配置図 …… 15・16
第９図　ＳＢ03 …… 17
第10図　ＳＢ18 …… 18
第11図　ＳＢ63 …… 20
第12図　ＳＢ74 …… 21
第13図　ＳＢ146 …… 23
第14図　ＳＢ236 …… 24
第15図　ＳＡ157 …… 25
第16図　ＳＩ47 …… 27
第17図　ＳＩ62 …… 28
第18図　ＳＩ166 …… 29
第19図　ＳＩ196 …… 30
第20図　ＳＥ14・22・26 …… 34
第21図　ＳＥ45・93・98 …… 35
第22図　ＳＥ164・195・200 …… 37
第23図　ＳＥ224・381 …… 38
第24図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（１）…… 39
第25図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（２）…… 40
第26図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（３）…… 41
第27図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（４）…… 42
第28図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（５）…… 43
第29図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（６）…… 44
第30図　ＳＯ216・300 …… 48
第31図　ＳＯ407・416 …… 49
第32図　ＳＮ130・442・443・444・465 …… 51
第33図　ＳＫ34・36・43・44・85 …… 54
第34図　ＳＫ138・154・160・169・173 …… 55
第35図　ＳＫ198・213・214・217・218・220 …… 58
第36図　ＳＫ221・222・225・325・328・330・476 …… 61
第37図　ＳＫ331・380・382・383・384・406 …… 62
第38図　ＳＫ412・413・414・417・418・445 …… 64
第39図　ＳＫ446・448・451・452・477・487・491 …… 66
第40図　土坑出土遺物（Ａ区）…… 68

第41図　ＳＫＣ427・447・449……70
第42図　ＳＤ94（Ａ区）……72
第43図　ＳＤ219・256・332・333……73
第44図　溝跡出土遺物（Ａ区）（１）……74
第45図　溝跡出土遺物（Ａ区）（２）……75
第46図　遺構外出土遺物（Ａ区）（１）……85
第47図　遺構外出土遺物（Ａ区）（２）……86
第48図　遺構外出土遺物（Ａ区）（３）……87
第49図　ＳＫ129・134・135……89
第50図　ＳＫ136・137……90
第51図　土坑・溝跡出土遺物（Ｂ区）……91
第52図　ＳＤ94（Ｂ区）……92
第53図　ＳＤ64・132・133・142……93
第54図　［参考］暦年較正年代グラフ（１）……97
第55図　［参考］暦年較正年代グラフ（２）……98
第56図　［参考］暦年較正年代グラフ（３）……101
第57図　種実遺体群集……115

表　目　次

第１表　船戸遺跡周辺遺跡一覧表……８
第２表　ＳＢ03柱穴一覧表……17
第３表　ＳＢ18柱穴一覧表……19
第４表　ＳＢ63柱穴一覧表……20
第５表　ＳＢ74柱穴一覧表……21
第６表　ＳＢ146柱穴一覧表……23
第７表　ＳＢ236柱穴一覧表……24
第８表　ＳＡ157柱穴一覧表……25
第９表　ＳＩ47柱穴一覧表……31
第10表　ＳＩ62柱穴一覧表……31
第11表　ＳＩ166柱穴一覧表……31
第12表　ＳＩ196柱穴一覧表……31
第13表　井戸跡出土遺物一覧表（Ａ区）（１）……45
第14表　井戸跡出土遺物一覧表（Ａ区）（２）……46
第15表　土坑出土遺物一覧表（Ａ区）……68
第16表　溝跡出土遺物一覧表（Ａ区）……75
第17表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（１）……77
第18表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（２）……78
第19表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（３）……79
第20表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（４）……80
第21表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（５）……81
第22表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（６）……82
第23表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（７）……83
第24表　柱穴様ピット一覧表（Ａ区）（８）……84
第25表　遺構外出土遺物一覧表（Ａ区）……87
第26表　土坑・溝跡出土遺物一覧表（Ｂ区）……91
第27表　柱穴様ピット一覧表（Ｂ区）……94
第28表　炭素年代測定試料一覧（平成24年度）……97
第29表　放射性炭素年代測定結果（平成24年度）……97
第30表　炭素年代測定試料一覧（平成25年度）……100
第31表　放射性炭素年代測定結果（平成25年度）……100
第32表　樹種同定結果（平成24年度）……102
第33表　樹種同定結果（平成25年度）……104
第34表　漆塗膜調査試料……106
第35表　漆器の断面観察結果表……106
第36表　曲げ物底板の断面観察結果表……107
第37表　船戸遺跡出土木製品同定表……109
第38表　種実同定結果（１）……111
第39表　種実同定結果（２）……112
第40表　種実同定結果（３）……113
第41表　種実出土状況……116
第42表　ウルシ属核の大きさ……119

図　版　目　次

図版１　船戸遺跡上空から（真上）：2001年国土地理院撮影
図版２　船戸遺跡上空から（真上）：1975年国土地理院撮影
図版３　１　Ａ区北部全景（南→）　２　Ａ区南部全景（南→）
図版４　１　Ａ区　ＳＢ03（北→）　２　Ａ区　ＳＢ146（東→）
３　Ａ区　ＳＢ236（東→）　４　Ａ区　ＳＡ157（南東→）
５　Ａ区　ＳＩ47（南→）　６　Ａ区　ＳＩ62（南→）
７　Ａ区　ＳＩ166（南→）　８　Ａ区　ＳＩ196（南→）
図版５　１　Ａ区　ＳＥ14（南西→）　２　Ａ区　ＳＥ22（南東→）　３　Ａ区　ＳＥ26（北東→）
４　Ａ区　ＳＥ26遺物出土状況（北西→）　５　Ａ区　ＳＥ45（南→）
６　Ａ区　ＳＥ45遺物出土状況（南→）　７　Ａ区　ＳＥ93（東→）　８　Ａ区　ＳＥ98（南東→）
９　Ａ区　ＳＥ164（南東→）　10　Ａ区　ＳＥ195（西→）　11　Ａ区　ＳＥ195遺物出土状況（南→）
12　Ａ区　ＳＥ200（北東→）　13　Ａ区　ＳＥ224（東→）　14　Ａ区　ＳＥ381（南→）
図版６　１　Ａ区　ＳＯ216（東→）　２　Ａ区　ＳＯ300（南→）　３　Ａ区　ＳＯ407（東→）
４　Ａ区　ＳＯ416（西→）　５　Ａ区　ＳＮ130（東→）　６　Ａ区　ＳＮ442（西→）
７　Ａ区　ＳＮ443（西→）　８　Ａ区　ＳＮ444（南→）　９　Ａ区　ＳＮ465（南東→）
10　Ａ区　ＳＫ34（南→）　11　Ａ区　ＳＫ36（南→）　12　Ａ区　ＳＫ43（南東→）
13　Ａ区　ＳＫ44（東→）　14　Ａ区　ＳＫ85（南東→）　15　Ａ区　ＳＫ138（東→）
図版７　１　Ａ区　ＳＫ154（南→）　２　Ａ区　ＳＫ154遺物出土状況（南西→）　３　Ａ区　ＳＫ160（東→）
４　Ａ区　ＳＫ169（南東→）　５　Ａ区　ＳＫ173（南→）　６　Ａ区　ＳＫ198（南→）
７　Ａ区　ＳＫ213（東→）　８　Ａ区　ＳＫ214（東→）　９　Ａ区　ＳＫ217（南→）
10　Ａ区　ＳＫ218（南→）　11　Ａ区　ＳＫ220（東→）　12　Ａ区　ＳＫ221（東→）
13　Ａ区　ＳＫ222（東→）　14　Ａ区　ＳＫ225（東→）　15　Ａ区　ＳＫ325（西→）

図版８　１　Ａ区　ＳＫ328（南→）　２　Ａ区　ＳＫ330（南西→）　３　Ａ区　ＳＫ331（南→）
４　Ａ区　ＳＫ380（南→）　５　Ａ区　ＳＫ382（西→）　６　Ａ区　ＳＫ383（東→）
７　Ａ区　ＳＫ384（南西→）　８　Ａ区　ＳＫ406（南東→）　９　Ａ区　ＳＫ412（南→）
10　Ａ区　ＳＫ413（南→）　11　Ａ区　ＳＫ414（南東→）　12　Ａ区　ＳＫ417（南→）
13　Ａ区　ＳＫ418（南→）　14　Ａ区　ＳＫ445（西→）　15　Ａ区　ＳＫ446（東→）
図版９　１　Ａ区　ＳＫ448（南東→）　２　Ａ区　ＳＫ451（南西→）　３　Ａ区　ＳＫ452（南西→）
４　Ａ区　ＳＫ467（南→）　５　Ａ区　ＳＫ447・487（東→）　６　Ａ区　ＳＫ491（西→）
７　Ａ区　ＳＫＣ427確認状況（東→）　８　Ａ区　ＳＫＣ427炭・焼土出土状況（北→）
９　Ａ区　ＳＫＣ427（東→）　10　Ａ区　ＳＫＣ447骨・炭出土状況（東→）
11　Ａ区　ＳＫＣ447骨出土状況（東→）　12　Ａ区　ＳＫＣ447（東→）
13　Ａ区　ＳＫＣ449骨・焼土出土状況（西→）　14　Ａ区　ＳＫＣ449骨出土状況（西→）
15　Ａ区　ＳＫＣ449（東→）
図版10　１　Ａ区　ＳＤ94（東→）
２　Ａ区　ＳＤ219（東→）　３　Ａ区　ＳＤ256（南東→）
４　Ａ区　ＳＤ332（南→）　５　Ａ区　ＳＤ333（東→）
図版11　１　Ｂ区北部全景（南→）　２　Ｂ区南部全景（南→）
図版12　１　Ｂ区　ＳＫ129（南→）　２　Ｂ区　ＳＫ134（東→）
３　Ｂ区　ＳＫ135（東→）　４　Ｂ区　ＳＫ136（南西→）
５　Ｂ区　ＳＫ137（東→）　６　Ｂ区　ＳＤ64（西→）
７　Ｂ区　ＳＤ94（南西→）　８　Ｂ区　ＳＤ132・133・142（南→）
図版13　出土遺物（１）
図版14　出土遺物（２）
図版15　出土遺物（３）
図版16　出土遺物（４）
図版17　出土遺物（５）
図版18　出土遺物（６）
図版19　出土遺物（７）
図版20　炭化材（１）
図版21　炭化材（２）
図版22　炭化材（３）
図版23　炭化材（４）
図版24　１　写真１　No.１内面　２　写真２　No.１内面の断面
３　写真３　No.１外面　４　写真４　No.１外面の断面
５　写真５　No.２内面　６　写真６　No.２内面の断面
７　写真７　No.２外面　８　写真８　No.２外面の断面
図版25　９　写真９　No.３内面　10　写真10　No.３内面の断面（下層）
11　写真11　No.３内面の断面（上層）
12　写真12　No.３外面　13　写真13　No.３外面の断面
14　写真14　No.４Ａ面　15　写真15　No.４Ａ面の断面
図版26　16　写真16　No.４Ｂ面　17　写真17　No.４Ｂ面の断面
樹種同定（１）
図版27　樹種同定（２）
図版28　樹種同定（３）
図版29　樹種同定（４）
図版30　種実遺体（１）
図版31　種実遺体（２）
図版32　種実遺体（３）
図版33　種実遺体（４）
図版34　火葬施設（ＳＫＣ449）出土骨

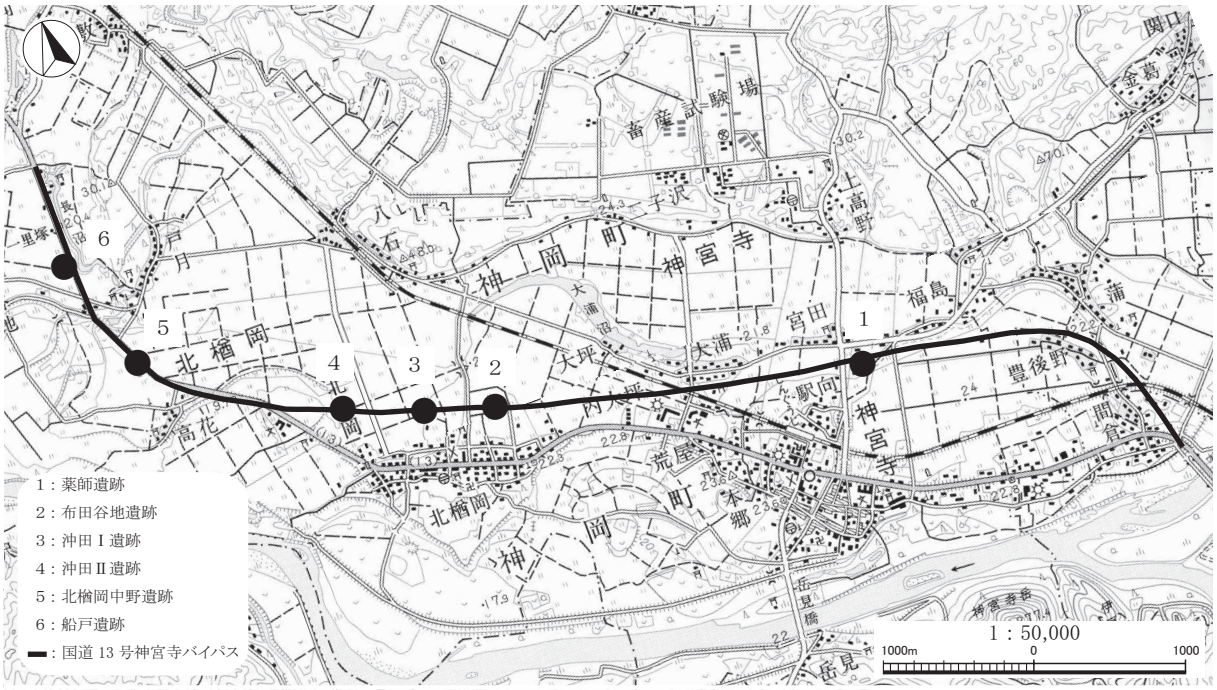
第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道13号は、福島県福島市を起点として山形県山形市・新庄市、秋田県湯沢市・横手市・大仙市等の主要都市を経て秋田市に至る総延長314.6kmの主要幹線道路である。

大仙市大曲・神岡地域を通過する一般国道13号は、沿道地域の開発、地域間交流の増大等によって交通量が増加し、市街地での走行速度の低下、渋滞の発生、冬期の積雪による幅員狭小等、広域幹線道路としての機能が低下している。一般国道13号神宮寺バイパスは、これらの問題を解消するとともに、平成13年度に完成した刈和野バイパス及び大曲バイパスと一体的に機能し、大仙都市圏の産業・経済・文化の一層の発展と人口の定着による生活改善を図るために計画された路線で、大仙市花館を起点として大仙市北楢岡を終点とする延長9.6km、幅員28.0mの自動車専用道路である。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所より文化財保護法に基づいて、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、平成14（2002）年度から平成23（2011）年度まで計画路線内の分布調査を実施した。この結果、路線内に新発見の遺跡が計６遺跡（第１図）あることを確認した。このため埋蔵文化財包蔵地および包蔵地と推測される地区については、今後確認調査が必要であることと、確認調査の結果で記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施すべきことを回答した。以上の経緯に基づいて、平成23(2011) 年度に船戸遺跡の確認調査を行い、遺跡の一部が計画路線内に及んでいることを確認し、平成24（2013）年度に発掘調査を実施するに至った。



第１図　路線と遺跡

「大曲〔平成5年要部修正〕（高速自動車道）」
「刈和野〔平成 20 年修正〕」

第２節　発掘調査の経過

平成24年５月14日から８月10日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。本調査に先立ち４月18日から25日と５月７日から11日まで表土除去を行った。

【第１週】５月14日～５月18日

14日、調査開始。発掘機材を搬入し現場周辺の環境整備を行う。15日、Ａ・Ｂ両調査区の刈り払い作業を行い、午後、Ａ区の粗掘りを開始する。中世陶器片（甕）１点が出土。16日、Ｂ区の粗掘りを開始。17日、Ａ区で土坑２および柱穴様ピット23を検出。

【第２週】５月21日～５月25日

Ａ区においては南側の付け替え道路予定箇所、および南側中央部の遺構確認作業を行う。竪穴建物跡２、土坑７、柱穴様ピット57を新たに検出。竪穴建物跡は１辺約３ｍの方形で南側に張り出しを伴う。中世陶器片１点が出土。柱穴様ピットについては精査を開始。Ｂ区においては粗掘りと遺構確認作業を行い、土坑１、溝跡１、柱穴様ピット１を検出。23日、湯沢河川国道事務所監督官来跡。

【第３週】５月28日～６月１日

Ａ区南側付け替え道路部分の粗掘りと遺構確認。焼土遺構１、柱穴様ピット１を新たに確認。南側中央部では柱穴様ピット７を新たに検出。また、溝跡から13世紀代の擂鉢の片口および底部の破片が出土。Ｂ区は粗掘りを完了し、遺構確認作業を進める。土坑５、溝跡３を検出。

【第４週】６月４日～６月８日

Ａ区南側付け替え道路部分、および南側中央部での遺構確認および精査を継続。土坑、柱穴様ピットを確認。Ｂ区では排土置き場南端に設置したトレンチで、Ａ区から延びる大溝の一部を確認する。

【第５週】６月11日～６月15日

Ａ区南側の付け替え道路の工事が開始される（秋田振興建設（株））。Ａ区、Ｂ区ともに土坑、溝跡、柱穴様ピットの精査を継続。Ａ区南側においては道路盛土部分を除去し、遺構確認作業を行う。15日、文化財保護室長来跡。

【第６週】６月18日～６月22日

Ａ区での遺構確認作業を行い、新たに幅２ｍ程の溝跡１条を確認。時期は不明。Ｂ区では重機による表土除去を終了し遺構確認を開始するが、新たな遺構の確認はない。Ｂ区南側でガードレール移設、土留柵撤去、表土除去開始。

【第７週】６月25日～６月29日

Ａ区の遺構確認および精査作業。新たにかまど状遺構や土坑等を検出。遺構内から中世陶器および温石などが出土。Ｂ区南側部分では調査を終了する。この区域で検出した遺構は溝跡１のみであった。

【第８週】７月２日～７月６日

Ａ区北側での粗掘りを開始。Ａ区南側では遺構精査を継続、井戸跡の掘り下げと柱穴様ピットの精査を進める。

【第９週】７月９日～７月13日

Ａ区北側の粗掘りは１／２程を終了した。Ａ区南側では遺構精査を継続。井戸跡の掘り下げおよび実測作業と柱穴様ピットの精査を進める。井戸跡から漆塗椀などの木製品が出土。

【第10週】７月17日～７月20日

Ａ区北側では粗掘りと遺構確認を並行して進め、粗掘りについては３／４程を終了した。遺構は柱穴様ピットや溝跡を検出する。Ａ区南側では井戸跡および土坑を中心に遺構精査を継続。また、柱穴様ピットの集中する区域の精査を進めるが、掘立柱建物跡に組み合うものは確認されていない。20日秋田さきがけ新報社大曲支局取材。

【第11週】７月23日～７月28日

Ａ区北側は粗掘り作業を継続するが降雨により冠水し、排水作業のためたびたび作業を中断する。Ａ区南側では井戸跡、柱穴様ピットの精査、記録作業を継続。28日、遺跡見学会開催。参加者152名。

【第12週】７月30日～８月３日

Ａ区北側での粗掘りと遺構確認を完了。今週新たに確認した火葬施設や焼土遺構を除いた他の遺構については精査も終えている。Ａ区南側では井戸跡・土坑についての精査ならびに記録作業を継続する。

【第13週】８月６日～８月10日

Ａ区北側は残余の遺構精査、記録作業と調査区全体の測量作業。Ａ区南側では土坑、かまど状遺構、焼土遺構、柱穴様ピットの精査ならびに記録補足作業を行う。10日、機材を撤収し調査を終了する。

第３節　整理作業の経過

平成24年度は発掘調査の終了した８月下旬以降、出土遺物の洗浄、注記作業を行った上で選別し、一部について実測作業を行った。また、発掘現場で作成した図面類および写真データの整理作業も併せて実施した。Ｃ14年代測定および樹種同定、種実同定、漆塗膜調査など科学的分析に関する委託も24年度に実施した。平成25年度は報告書作成の具体的作業に着手するとともに、木製品についての保存処理を委託した。報告書作成作業は同年度の12月までに原稿を完成させ、終了後、翌年３月末までに印刷・製本作業、そして図面類、写真データの記録類、ならびに出土遺物の収納を行って、整理作業の全工程を完了した。

参考文献

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第365集　2003（平成15）年
秋田県教育委員会　『薬師遺跡　－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』　秋田県文化財調査報告書第388集　2005（平成17）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第413集　2006（平成18）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第420集　2007（平成19）年
秋田県教育委員会　『布田谷地遺跡　－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』　秋田県文化財調査報告書第433集　2007（平成19）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第475集　2008（平成20）年
秋田県教育委員会　『沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡　－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第443集　2009（平成21）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第456集　2010（平成22）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第465集　2011（平成23）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第475集　2012（平成24）年

第２章　遺跡の位置と環境

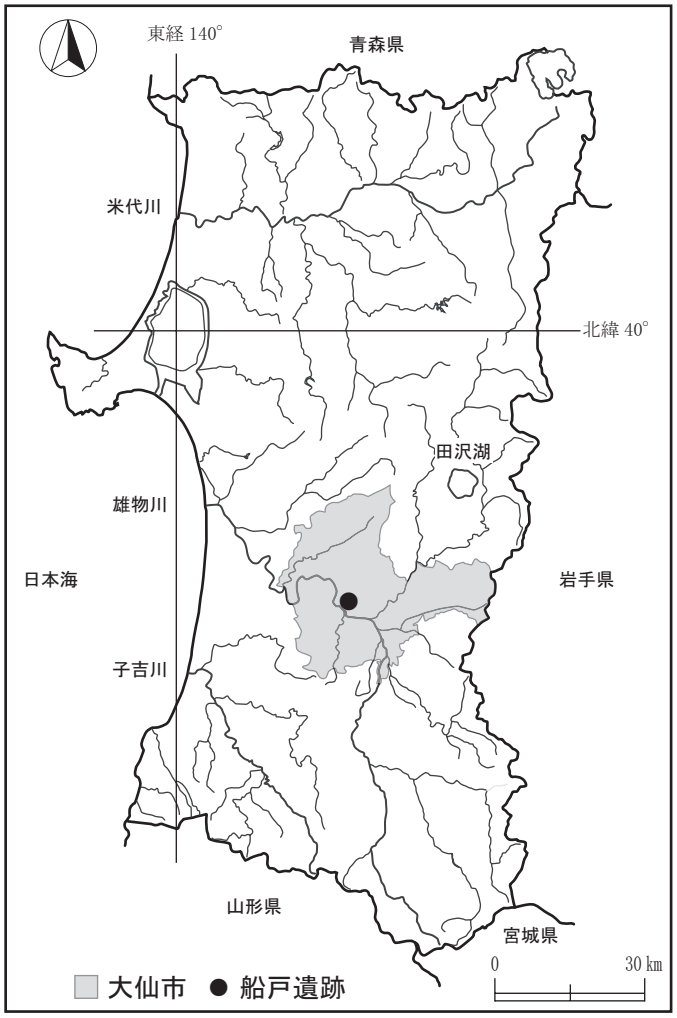
第１節　地理的環境

船戸遺跡の所在する大仙市は、秋田県の南東部に位置する。平成17（2005）年３月、大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町の一市六町一村が合併し、現在の大仙市が誕生した。東は仙北市・岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市と、南は横手市・美郷町と、北は仙北市と接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道などの陸路・鉄路の結節点として拠点機能の強化が進んでいる。

船戸遺跡は大仙市神岡地域北部の北楢岡地区に所在し、ＪＲ奥羽本線神宮寺駅から北西へ約５㎞の北緯39度31分10秒、東経140度22分37秒に位置している（第２図）。

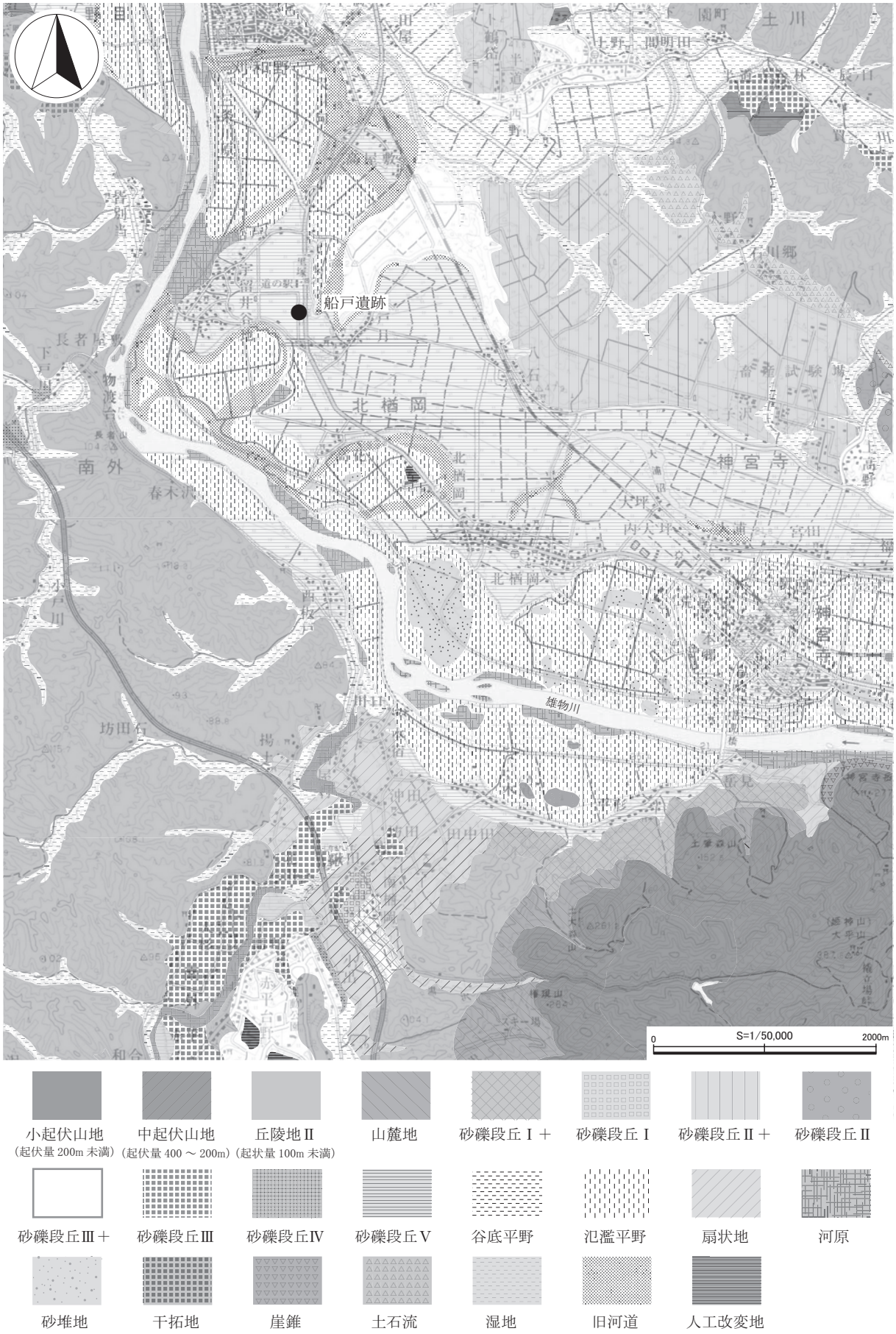
遺跡の西方約1.4㎞を、横手盆地南端の山地を源流にする雄物川が北流しており、出羽山地を先行的に横断し、秋田平野に出て日本海に注いでいる。遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、台地（段丘地）、低地によって構成される。遺跡の東側一帯は、高野台地が広がっている。高野台地の段丘面は、かつては草地として重視された歴史もあるが、近年は田地や畑地の耕地化が進み、また段丘崖とともに杉の人工林が目立っている。

一方、雄物川を挟んだ南側には出羽山地に属する姫神山山地があり、姫神山（387.6ｍ）や神宮寺嶽（277ｍ）がそびえ、その側辺は段丘や低地になっている。遺跡の東西および南側の低地（中央低台地）は雄物川によって形成された先行谷の中にあり、独特の幅狭い狭窄部低地といった峡谷の景観ではなく、広々とした氾濫平野の感じを強く印象づける眺望である。現在は水田地帯として整備されているが、先行谷最下位の低地には、河原、氾濫平野、砂堆地、旧河道などが散在する。先行谷の広がりは、雄物川下流の刈和野地区や強首地区まで続き、特に強首地区の左岸一帯は、曲流部の緩やかな滑走斜面で、そこには広大な七段の砂礫段丘が、反対の攻撃的斜面には河触崖がみられる。



第２図　遺跡位置図

遺跡は、雄物川右岸に形成された標高約19～20ｍの河岸段丘上に立地している。地


船戸遺跡
北楢岡
南外
神宮寺
雄物川
S=1/50,000
0
2000m
小起伏山地
（起伏量 200m 未満）
中起伏山地
（起伏量 400 ～ 200m）
丘陵地Ⅱ
（起状量 100m 未満）
山麓地
砂礫段丘Ⅰ＋
砂礫段丘Ⅰ
砂礫段丘Ⅱ＋
砂礫段丘Ⅱ
砂礫段丘Ⅲ＋
砂礫段丘Ⅲ
砂礫段丘Ⅳ
砂礫段丘Ⅴ
谷底平野
氾濫平野
扇状地
河原
砂堆地
干拓地
崖錐
土石流
湿地
旧河道
人工改変地

第３図　地形分類図

質は、第四紀洪積世に形成された礫・砂および泥層である。また、遺跡周辺の土地利用は水田がその多くを占めている。

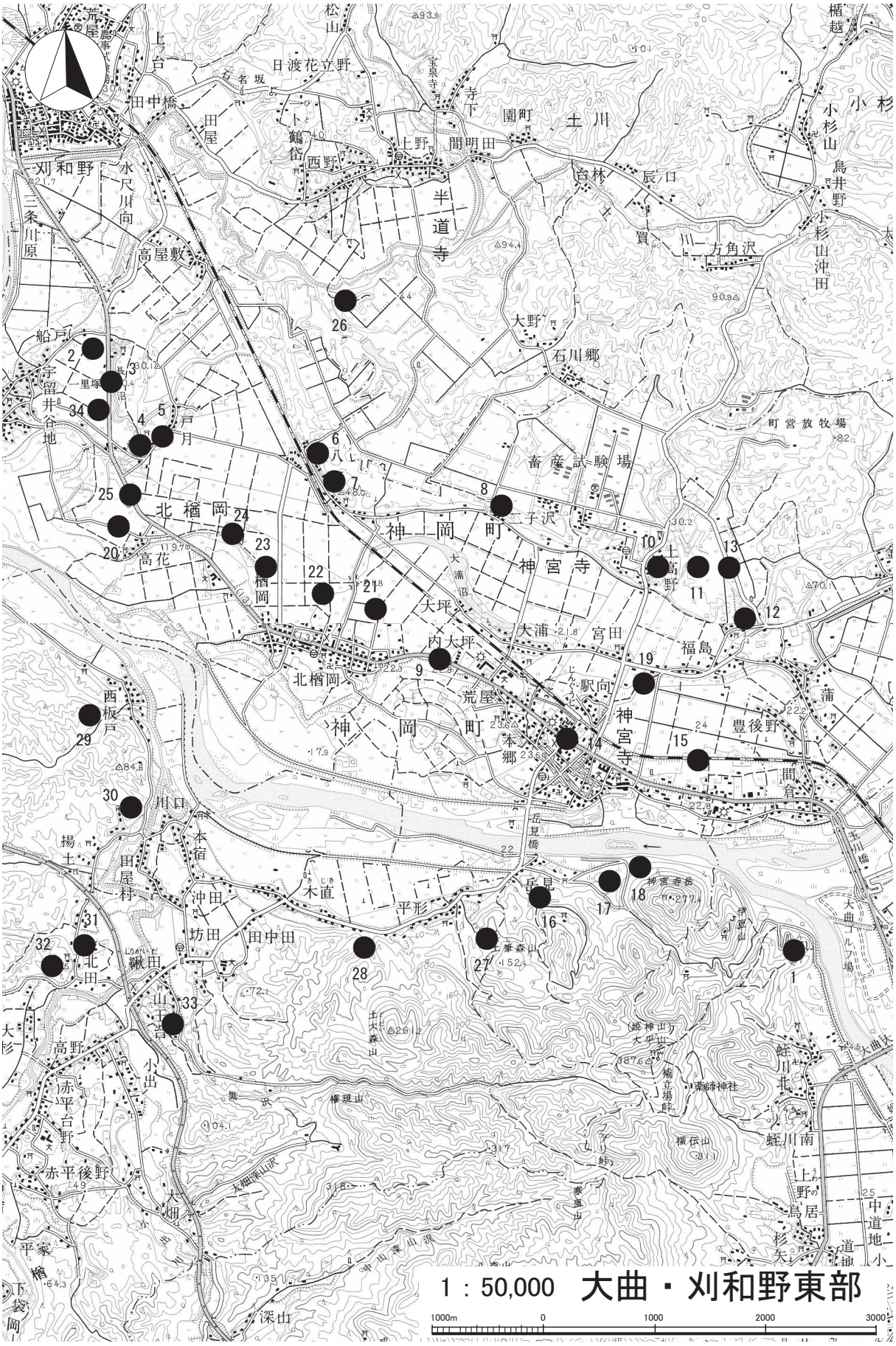
第２節　歴史的環境

船戸遺跡（34）は中世を主体とする遺跡で、平安時代・近世の遺物も出土している。同遺跡の周囲に所在する縄文時代から近世までの主要な遺跡について概観する。なお、遺跡名の次の（　）内の数字は、第４図と第１表の表示番号に対応している。

縄文時代の遺跡は、中期から晩期までの計14遺跡が確認されており、晩期の遺跡が多い。中期の高野Ⅰ遺跡（10）・笹倉遺跡（13）、中期～後期の愛宕下遺跡（16）、後期～晩期の薬師遺跡（19）・布田谷地遺跡（21）、後期の沖田Ⅰ遺跡（22）、晩期の萩の台遺跡（６）・上高野遺跡（８）・小沢遺跡（17）・落貝遺跡（18）・茨野遺跡（20）、時期不詳の八石遺跡（７）・北田遺跡（31）・山王台遺跡（33）がある。高野Ⅰ遺跡と笹倉遺跡は、昭和28・29（1953・1954）年に武藤鉄城氏によって発掘調査が行われ、高野Ⅰ遺跡では中期の大木式土器が出土し、笹倉遺跡では７基の組石遺構を検出した。薬師遺跡は平成15（2003）年に発掘調査が行われ、後期と晩期の土器、石鏃・石匙・磨製石斧などの石器類が出土した。小沢遺跡は昭和60（1985）年に確認調査、平成元（1988）年に発掘調査が行われ、晩期の大洞Ｂ～Ａ式の土器が出土し、時期不明のかまど跡が検出されている。落貝遺跡は、昭和40（1965）年に豊島昴氏によって発掘調査され、２基の組石棺を検出し、晩期の粗製土器も出土した。茨野遺跡は、平成14・15（2002・2003）年に旧神岡町教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代後期と中世の集落跡が発見された。愛宕下遺跡からは、青龍刀形石器、石鏃、石棒が出土している。

古代の遺跡では、高野Ⅱ遺跡（11）・坊ヶ沢遺跡（12）・布田谷地遺跡（21）・沖田Ⅰ遺跡（22）・新山遺跡（24）・北楢岡中野遺跡（25）の計６遺跡が確認されている。坊ヶ沢遺跡では須恵器の大甕が出土した。布田谷地遺跡は平成18（2006）年に発掘調査が行われ、平安時代の集落跡から、「大」「万」を縦に重ね合わせた吉祥文字を記した墨書土器が出土した。

中世の遺跡では、集落跡である薬師遺跡（19）と、昭和50年代に行われた分布調査などにより、丘陵上または平地に立地する多数の中世城館が確認されており、松山城（１）・龍蔵寺館（４）・富樫館（14）・神宮寺掃部館（15）・朝夷奈古柵（26）・平形館（27）・木直沢館（28）・猿倉沢館（29）・楢岡城（30）・壇ノ平館（32）が知られている。出羽山地の北東に突出した丘陵端に位置する松山城は、北東方向に並列する二つの嶺上にあり、二つの郭からなる城跡で、前九年の役の頃、阿部貞任・宗任が居城していたと言われている。馬場跡や湧水の存在も指摘されており、須恵器が出土している。龍蔵寺館は、比高およそ５ｍの単郭の館で、郭はほぼ台形である。北東隅に大山祇神社が祭られ、その近くに井戸跡がある。郭の北縁に、土塁が築かれ、その下方には空掘が存在する。郭の西麓には長沼があって内濠の役目を果たしたと推定されている。この館には、長禄の頃（1457～60年）、雄勝松岡城主柴田平九郎の老臣龍蔵寺伯耆守が移り住み、永禄８（1565）年落城したという。昭和50（1975）年に、この館付近で直径30～40㎝、長さ３ｍの、下部が削られ上部が朽ちた杉丸太がほぼ５ｍ間隔で出土した。富樫館は、かつて四方を川や沼沢で囲まれた天然の要塞であったと伝えられる。館を築いたのは富樫佐衛門佐誠白で、文和３（1254）年には氏神白山権現を勧請し、永徳２（1382）年に宝蔵



第４図　船戸遺跡（34）と周辺遺跡位置図

第１表　船戸遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡地図 登録番号	種　別	主な遺構・遺物
1	松山城	212－８－30	経塚	須恵器
2	三本杉経塚	212－45－１	経塚	経石
3	三本杉一里塚	212－45－２	一里塚	一里塚２基
4	龍蔵寺館	212－45－３	館跡	土塁、空堀、井戸跡（陥没）
5	龍蔵台経塚	212－45－４	経塚	
6	萩の台	212－45－５	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石鏃・石棒
7	八石	212－45－６	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石鏃・石匙・石斧
8	上高野	212－45－７	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石斧
9	小豆沢一里塚	212－45－８	一里塚	
10	高野Ⅰ	212－45－９	遺物包含地	縄文土器（後期・晩期）・土版・石匙・石錐・石斧
11	高野Ⅱ	212－45－10	遺物包含地	須恵器
12	坊ヶ沢	212－45－11	遺物包含地	須恵器完形甕
13	笹倉	212－45－12	遺物包含地	縄文土器（後期・晩期）・凹石
14	富樫館	212－45－13	館跡	
15	神宮寺掃部館	212－45－14	館跡	
16	愛宕下	212－45－15	遺物包含地	青竜刀型石器・石鏃・石棒
17	小沢	212－45－16	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石匙・石棒
18	落貝	212－45－18	遺物包含地	石棺、縄文土器・石鏃
19	薬師	212－45－19	集落跡	掘立柱建物跡、かまど状遺構、土坑、溝跡、縄文土器 須恵器系中世陶器、瓷器系中世陶器
20	茨野	212－45－20	集落跡	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、縄文土器・石器、青磁、青白磁 須恵器系中世陶器、フイゴ羽口、銭貨
21	布田谷地	212－45－21	狩猟場、集落跡	陥し穴、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、縄文土器、土師器 須恵器
22	沖田Ⅰ	212－45－22	集落跡	掘立柱建物跡、土坑、河道跡、井戸跡、溝跡、配石遺構 縄文土器、土師器、須恵器、墨書土器、陶磁器
23	沖田Ⅱ	2007年 新発見の遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、かまど状遺構、井戸跡、溝跡、土師器 須恵器、墨書土器、陶磁器
24	新山	2008年 新発見の遺跡	集落跡	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、柱列、旧河道 土師器、須恵器、墨書土器、木簡、木製品、風字硯
25	北楢岡中野	2009年 新発見の遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、かまど状遺構、井戸跡、溝跡 縄文土器・石鏃、土師器、須恵器、陶磁器
26	朝夷奈古柵	212－46－35	館跡	
27	平形館	212－55－１	館跡	主郭、竪堀
28	木直沢館	212－55－２	館跡	空堀
29	猿倉沢館	212－55－３	館跡	
30	楢岡城	212－55－４	城跡	主郭、腰郭、馬場跡、井戸跡、青磁
31	北田	212－55－５	遺物包含地	縄文土器、有柄石鏃、石匙、石錘、磨製石斧
32	檀ノ平館	212－55－６	館跡	主郭
33	山王台	212－55－７	遺物包含地	竪穴建物跡、縄文土器、石匙、石なた、石棒
34	船戸	本遺跡	散布地、集落跡	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡、かまど状遺構、 焼土遺構、土坑、火葬施設、溝跡、土師器、須恵器、陶磁器、 木製品、石製品、銭貨

寺を建立している。館跡の東側には蓮沼、北から西へ栗谷田に字名があり、栗谷田は厨田の当て字とも言われる。栗谷田との境には濠跡といわれる用水路があり、また、ＪＲ神宮寺駅前を東西に横切る水濠があったといわれ、台地の両側にはその跡と思われる幅約30ｍのくびれが見られる。神宮寺掃部館は長方形の単郭で、周囲の水田より３ｍほど高くなっている。北西の隅に土塁らしき土盛り、東側に犬走り状の低地がある。四周水濠によって囲まれていたと伝えられるが、現在は水田となっており痕跡不明である。館は正慶（1332～34年）の頃に築かれたという。また、平成15（2003）年に発掘調査が行われた薬師遺跡では、12世紀後半から13世紀半ばにわたる掘立柱建物跡、道路跡、かまど状遺構などからなる集落跡が検出され、須恵器系中世陶器や瓷器系中世陶器が出土した。

近世の遺跡では、三本杉経塚（２）・三本塚一里塚（３）・龍蔵台経塚（５）・小豆沢一里塚（９）や、平成20（2008）年に発掘調査が行われ、集落跡であることが判明した沖田Ⅱ遺跡（23）がある。

三本塚一里塚は、秋田県内における江戸期の交通遺跡の代表的なものとして、昭和34年に県の史跡に指定された。

引用・参考文献

神宮寺公民館 『笹倉・東高野遺跡発掘調査報告書』 1955（昭和30）年
秋田県 『土地分類基本調査　大曲』 1977（昭和52）年
秋田県 『土地分類基本調査　刈和野』 1979（昭和54）年
秋田県文化財保護協会 『秋田県の中世城館』 1981（昭和56）年
秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県南版）』 1987（昭和62）年
秋田県教育委員会 『秋田県の文化財』 1989（平成元）年
秋田県神岡町教育委員会 『小沢遺跡発掘調査報告書』 神岡町文化財調査報告書　2004（平成16）年
秋田県教育委員会 『薬師遺跡　－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第388集　2005（平成17）年
秋田県教育委員会 『布田谷地遺跡　－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』 秋田県文化財調査報告書第433集　2007（平成19）年
秋田県教育委員会 『沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡　－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』 秋田県文化財調査報告書第443集　2009（平成21）年

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査区は南北に走る国道13号線の西側と東側に分かれており、西側の旧水田・宅地跡をＡ区、東側の旧畑地と荒蕪地をＢ区と呼称した（第５図）。以下この呼称を用いる。

計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。Ａ区のほぼ中心をグリッド原点ＭＡ30（Ｘ＝-53280.000、Ｙ＝-39220.000）として、この杭から世界測地系国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。

この東西南北に沿って４×４ｍのグリッドを設定し、グリッド原点ＭＡ30を起点に、東西方向には東から西へ４ｍごとに「ＬＪ・ＬＫ・・・・ＬＯ・・・・・ＬＴ・ＭＡ・・・・・ＮＡ・ＮＢ・・・ＮＤ・ＮＥ」という２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４ｍごとに「・・・20・21・・・・39・40・41・・・・69・70・71・・・」という２～３桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４ｍ間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

調査は確認調査の結果に基づき、Ａ区とＢ区の一部を除き、バックホーにより表土除去を行った。包含層の掘り下げ及び遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は20分の１を原則とした。写真撮影には35㎜モノクロ・リバーサルフィルム及びデジタルカメラを使用した。

第２節　基本層序

調査区全域は、水田や畑地等の整地造成工事で、遺構確認面である第Ⅲ層（地山）まで削平が及んでおり、遺構上部は失われその遺存状態も良くなかった。このため、Ａ区の第Ⅱ層までと、Ｂ区の第Ⅰ層は、整地後の盛土と耕作土の単純層であった。遺跡の基本層序は、Ａ・Ｂ区ともに調査区西端に沿って入れた南北トレンチの西壁の土層から、以下のとおり観察できた（第７図）。

【Ａ区南側】

Ⅰ　灰黄褐色（10YR5/2）シルト：しまり強、粘性中　「耕作土」

Ⅱ　褐灰色（10YR5/1）シルト：しまり強、粘性中、地山粒状小５％混入　「盛土」

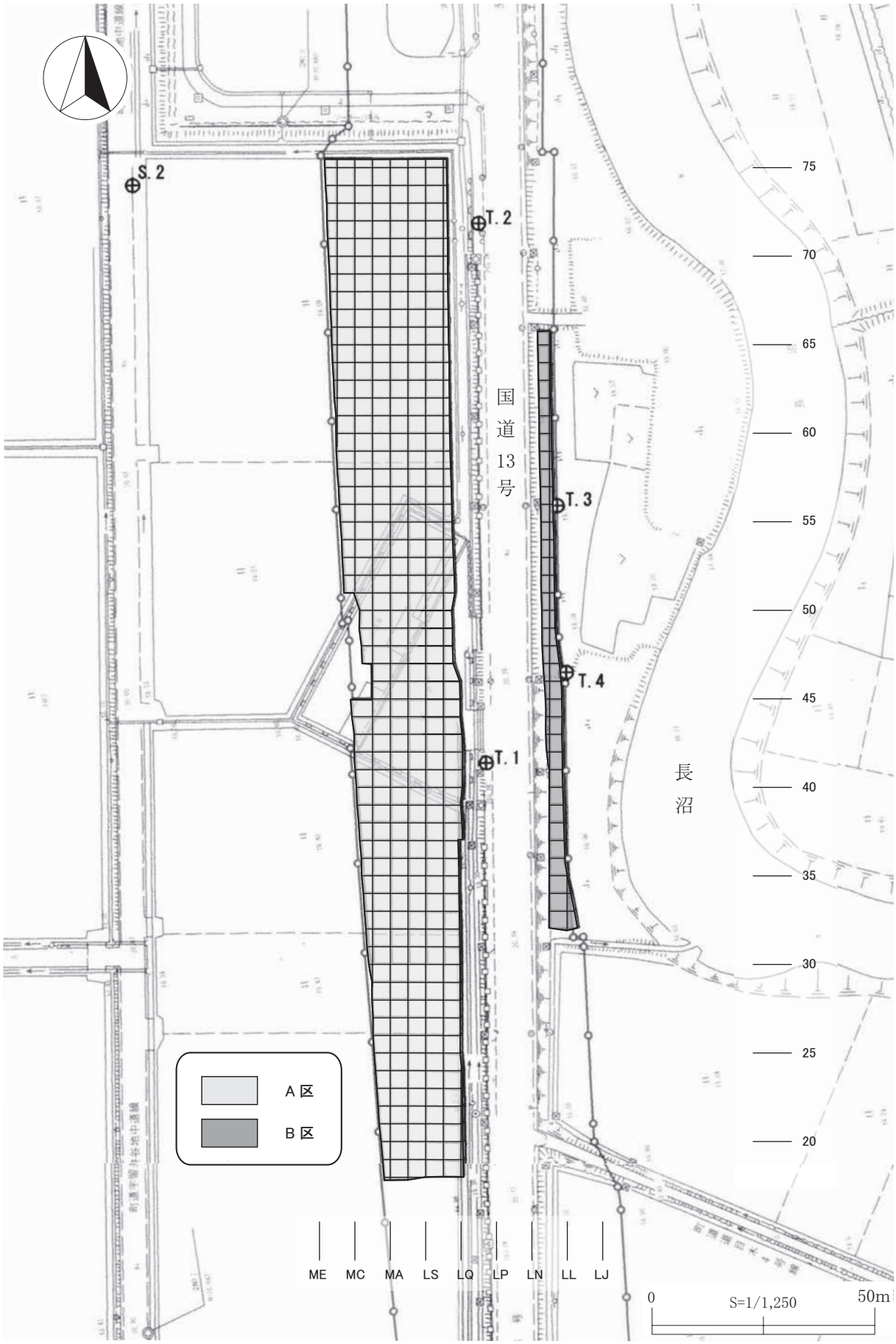
Ⅲ　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト：しまり強、粘性中「地山」

【Ａ区北側】

Ⅰ　灰黄褐色（10YR5/2）シルト：しまり強、粘性中　「耕作土」

Ⅱ　褐灰色（10YR5/1）シルト：しまり強、粘性中、地山粒状小７％混入　「盛土」

Ⅲ　褐色（10YR4/4）シルト：しまり強、粘性中「地山」



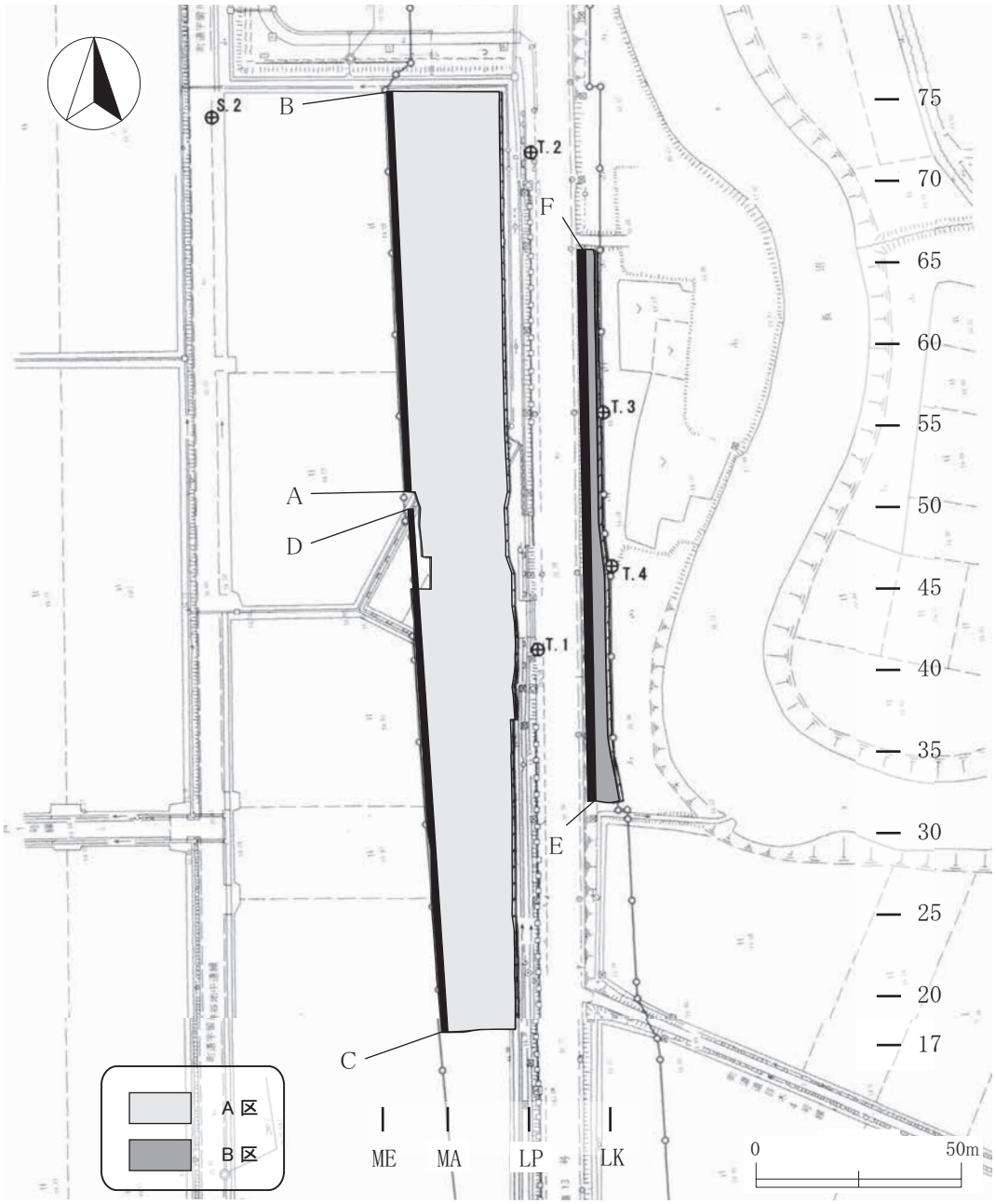
第５図　調査区とグリッド配置図

【Ｂ区】

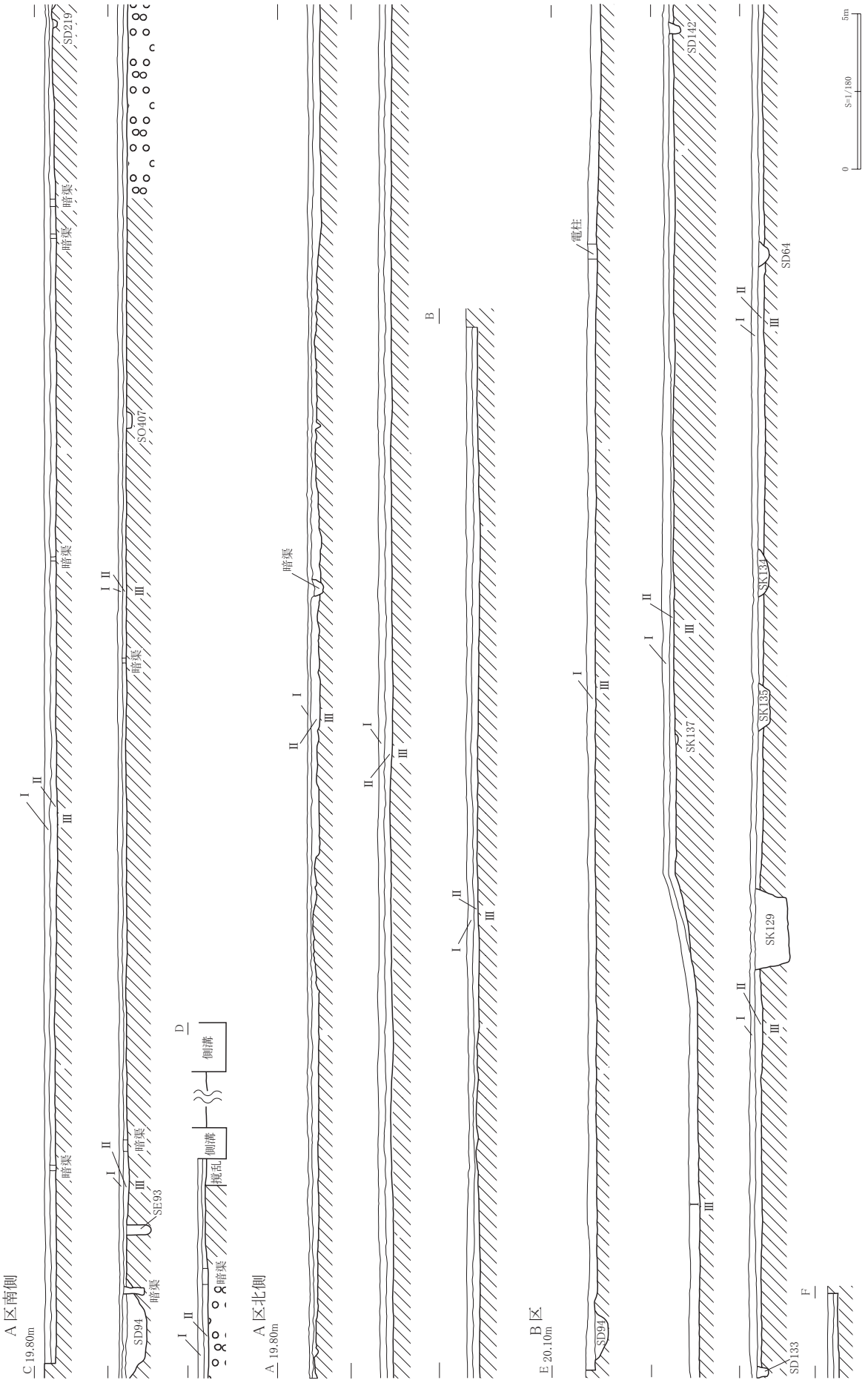
Ⅰ　暗褐色（10YR4/3）シルト：しまり強、粘性弱、小礫１％混入　「耕作土及び盛土」

Ⅱ　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト：しまり強、粘性弱　「地山漸位層」

Ⅲ　褐色（10YR4/4）シルト：しまり強、粘性弱　「地山」



第６図　Ａ・Ｂ区基本層序範囲図（▬：範囲）



第７図　調査区基本層序図

第３節　検出遺構と遺物

発掘調査の結果、Ａ・Ｂ区で検出された遺構は、掘立柱建物跡、柱穴列、竪穴建物跡、井戸跡、かまど状遺構、焼土遺構、土坑、火葬施設、溝跡、柱穴様ピット等の遺構である。

また、平安時代の土師器・須恵器、中世の陶磁器・木製品・石製品・銭貨、近世の銭貨等の遺物が中コンテナ（規格54×34×10㎝）で12箱分出土した。

Ａ・Ｂ区で検出した遺構の内訳は以下のとおりである。

【Ａ区】	掘立柱建物跡・・・・・・・・６棟	柱穴列・・・・・・・・・・・・１条	
	竪穴建物跡・・・・・・・・・・４軒	井戸跡・・・・・・・・・・・・11基	
	かまど状遺構・・・・・・・・４基	焼土遺構・・・・・・・・・・５基	
	土坑・・・・・・・・・・・・・・・・42基	火葬施設・・・・・・・・・・３基	
	溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・５条	柱穴様ピット・・・・・324基	（Ａ区 計405遺構）
【Ｂ区】	土坑・・・・・・・・・・・・・・・・５基	溝跡・・・・・・・・・・・・・・５基	
	柱穴様ピット・・・・・・・・14基		（Ｂ区 計 24遺構）

１　Ａ区の検出遺構と遺物

（１）掘立柱建物跡

【ＳＢ03】（第９図、図版４-１）

《位置・確認》ＭＡ35・36、ＭＢ35・36に位置する。第Ⅲ層上面で、北西－南東方向にほぼ等間隔に並列する柱穴を確認した。

《重複遺構》ＳＫＰ404と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《規模》桁行２間×梁行１間の南北棟の建物跡である。桁行の長さは西側柱列（Ｐ１－Ｐ３）で4.56ｍ、梁行の長さは北側柱列（Ｐ１－Ｐ４）で2.40ｍである。建物方位は西側柱列でＮ－3°－Ｅである。

《柱穴》６基検出された。これらの平面形は方形または楕円形と円形を呈しており、大きさは長軸0.27～0.45ｍ、短軸0.19～0.35ｍ、深さ0.11～0.28ｍである。柱痕跡を２基の柱穴で確認した。柱痕跡は径0.12～0.13ｍの円形である。個々の柱穴については第２表のとおりである。

《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。

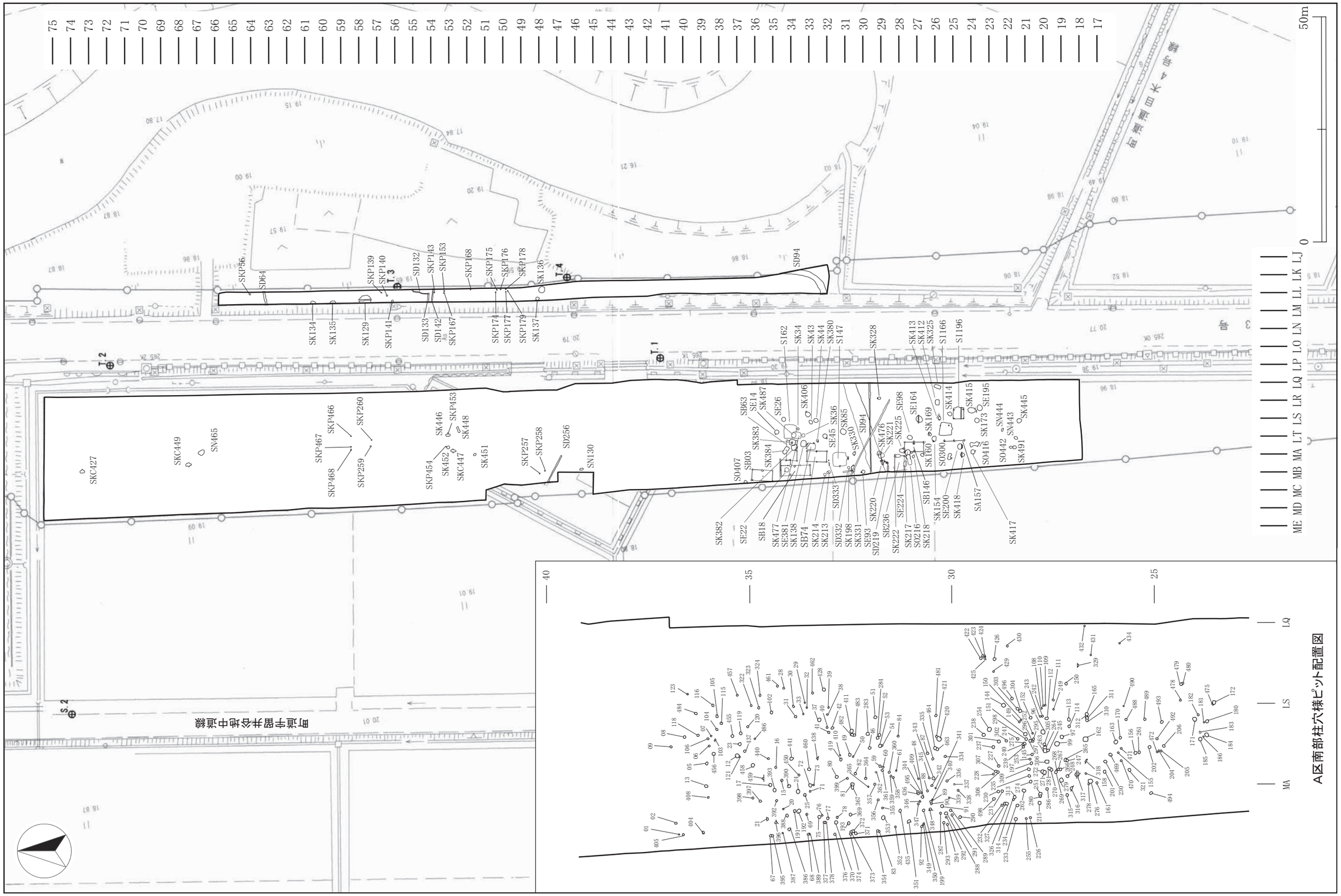
【ＳＢ18】（第10図）

《位置・確認》ＭＡ32・33・34、ＭＢ32・33・34に位置する。確認面は第Ⅲ層上面である。北側の柱穴は暗渠で削られている。

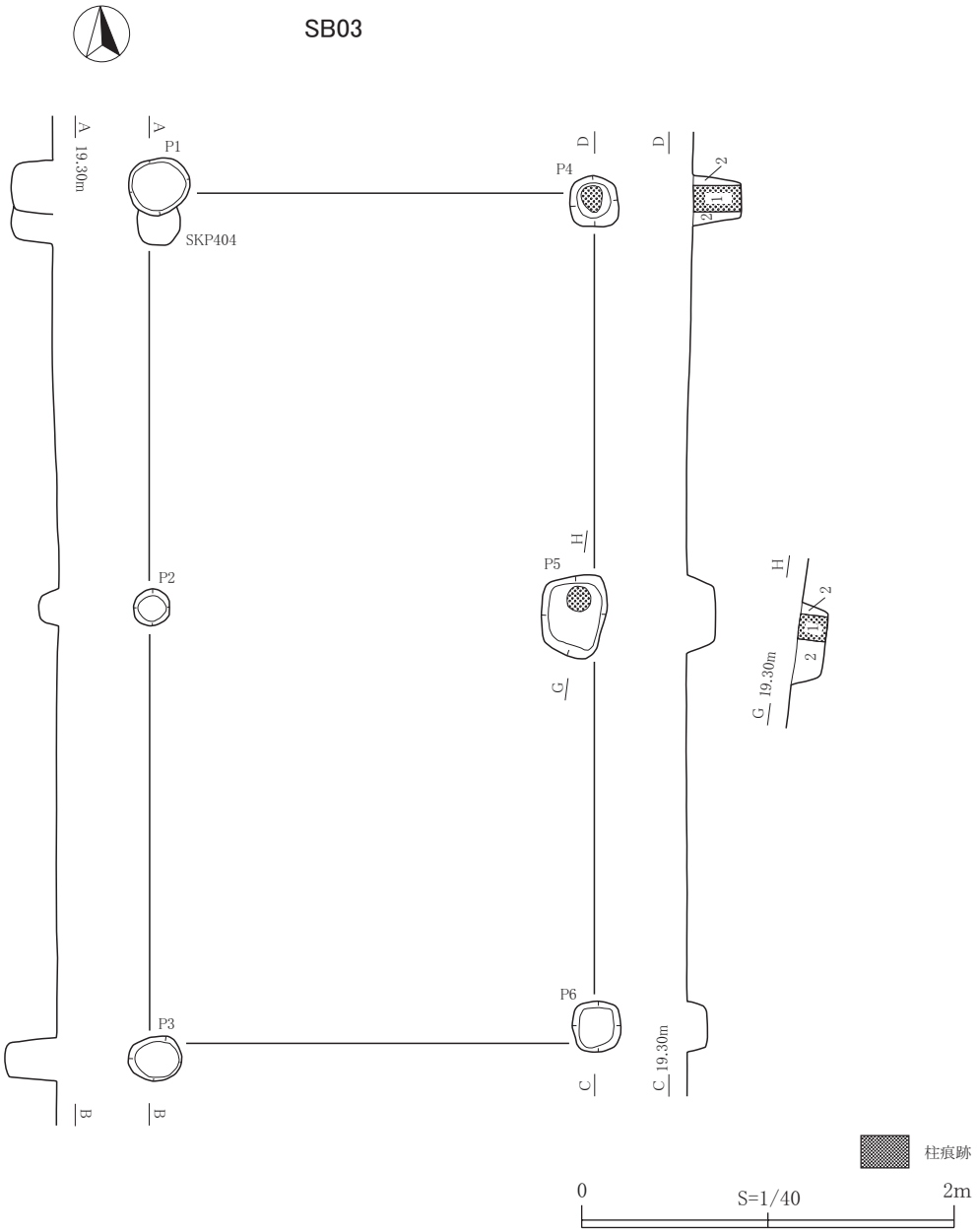
《重複遺構》ＳＢ63、ＳＥ22、ＳＫＰ20・27・192・386・396と重複する。新旧は本遺構の方がＳＫＰ386より新しいが、ＳＢ63、ＳＥ22、ＳＫＰ20・27・192・396との新旧関係は不明である。

《規模》桁行３間×梁行１間の南北棟の建物跡である。桁行の長さは東側柱列（Ｐ４－Ｐ７）6.48ｍ、北側柱列（Ｐ１－Ｐ４）2.25ｍである。北東側には東方向へ張り出しが設けられている。その大きさは2.10ｍ（Ｐ８－Ｐ９）×1.26ｍ（Ｐ４－Ｐ８）である。建物方位はＮ－１°－Ｗである。

《柱穴》８基検出された。これらの平面形は円形または楕円形を呈しており、大きさは長軸0.24～



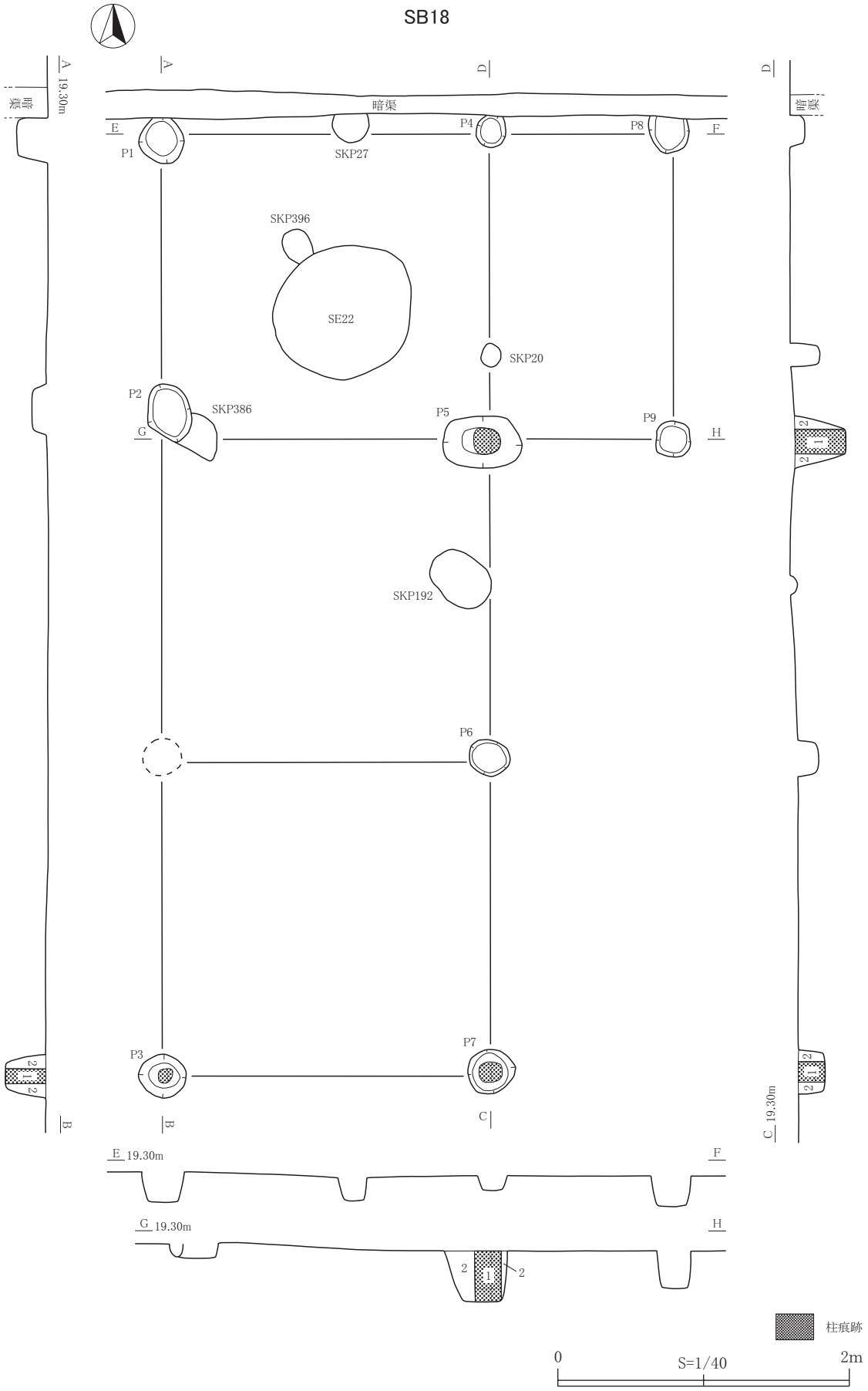
第８図　遺構配置図



第９図　ＳＢ03

第２表　ＳＢ03柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	0.33	0.30	0.22	18.96	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状小1%、地山粒状小3%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ２	円　形	0.20	0.19	0.11	19.10	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ３	楕円形	0.28	0.24	0.28	18.92	1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ４	方　形	0.27	0.26	0.26	18.91	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%、地山粒状小2%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ５	方　形	0.45	0.35	0.15	19.05	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、焼土粒状小～中2%、地山粒状小2%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小～小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ６	方　形	0.27	0.25	0.11	10.09	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小～小1%、焼土粒状小1%、地山粒状小3%混入


SB18
A 19.30m
暗渠
A
D
D
暗渠
暗渠
E
F
P1
SKP27
P4
P8
SKP396
SE22
SKP20
P2
SKP386
G
P5
P9
H
SKP192
P6
P3
P7
B
B
C
C 19.30m
E 19.30m
F
G 19.30m
H
2
1
2
柱痕跡
0
S=1/40
2m

第10図　ＳＢ18

第３表　ＳＢ18柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	(0.31)	0.31	0.21	19.00	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状小～中2%、焼土粒状小1%、地山粒状小3%混入
Ｐ２	楕円形	0.41	0.30	0.10	19.91	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小～小3%、焼土粒状小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ３	円　形	0.32	0.30	0.28	18.92	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
						2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、焼土粒状極小1%
Ｐ４	楕円形	(0.23)	0.20	0.10	19.09	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状小2%、地山粒状小～中3%混入
Ｐ５	楕円形	0.54	0.36	0.35	18.81	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小～小3%、焼土粒状小1%、地山粒状小5%混入
						2	褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状小2%、焼土粒状小2%、地山粒状小～中3%混入
Ｐ６	楕円形	0.28	0.24	0.14	18.99	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒状極小1%、焼土粒状極小1%、地山粒状小～中5%混入
Ｐ７	円　形	0.32	0.30	0.18	18.96	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状小～中2%、地山粒状小～中5%混入
						2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒状極小1%
Ｐ８	(楕円形)	0.28	(0.25)	0.21	18.97	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、焼土粒状小1%、地山粒状小～中5%混入
Ｐ９	円　形	0.24	0.24	0.26	18.99	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入

※（　）内の平面形は推定で、数値は残存値である。

0.30m、短軸0.24～0.29m、深さ0.11～0.20mである。柱痕跡を３基の柱穴で確認した。柱痕跡は径0.09～0.17mの円形である。個々の柱穴については第３表のとおりである。

《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。

【ＳＢ63】（第11図）

《位置・確認》ＬＴ33・34、ＭＡ33・34に位置する。第Ⅲ層上面において東西方向にほぼ等間隔に並列する柱穴を５基確認した。

《重複遺構》ＳＢ18、ＳＫ382・383・384、ＳＫＰ441・450と重複する。新旧は本遺構の方がＳＫ384より古いが、ＳＢ18、ＳＫ382・383、ＳＫＰ441・450との新旧関係は不明である。

《規模》桁行２間×梁行１間の東西棟の掘立柱建物跡である。桁行の長さは南側柱列（Ｐ２－Ｐ５）4.50m、東側柱列（Ｐ１－Ｐ２）2.34mである。建物方位は北側柱列でＮ－89°－Ｗである。

《柱穴》５基検出された。これらの平面形は円形または楕円形を呈しており、大きさは長軸0.23～0.34m、短軸0.18～0.30m、深さ0.16～0.26mである。柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第４表のとおりである。

《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。

【ＳＢ74】（第12図）

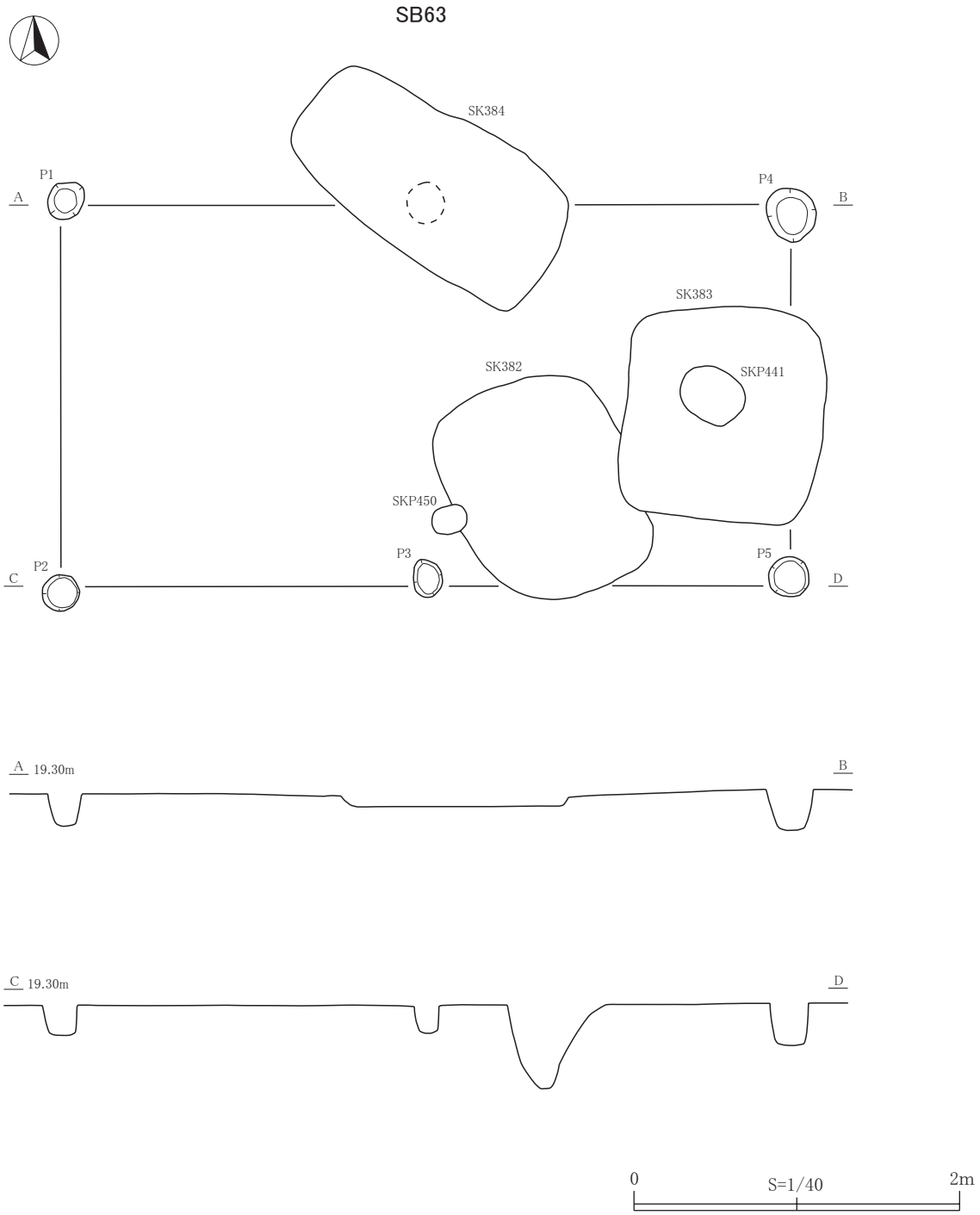
《位置・確認》ＬＴ31・32・33、ＭＡ31・32・33に位置する。第Ⅲ層上面において、北西－南東方向にほぼ等間隔に並列する柱穴を確認した。

《重複遺構》ＳＫＰ399と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《規模》桁行２間×梁行１間の南北棟の建物跡である。桁行の長さは西側柱列（Ｐ１－Ｐ３）4.47m、梁行の長さは北側柱列（Ｐ１－Ｐ４）2.40m、建物方位は西側柱列でＮ－２°－Ｅである。

《柱穴》６基検出された。平面形は楕円形と方形であり、大きさは長軸0.22～0.30m、短軸0.20～0.29mで、深さ0.08～0.18mである。柱痕跡を４基の柱穴で確認した。柱痕跡は径0.09～0.12mの円形である。個々の柱穴については第５表のとおりである。

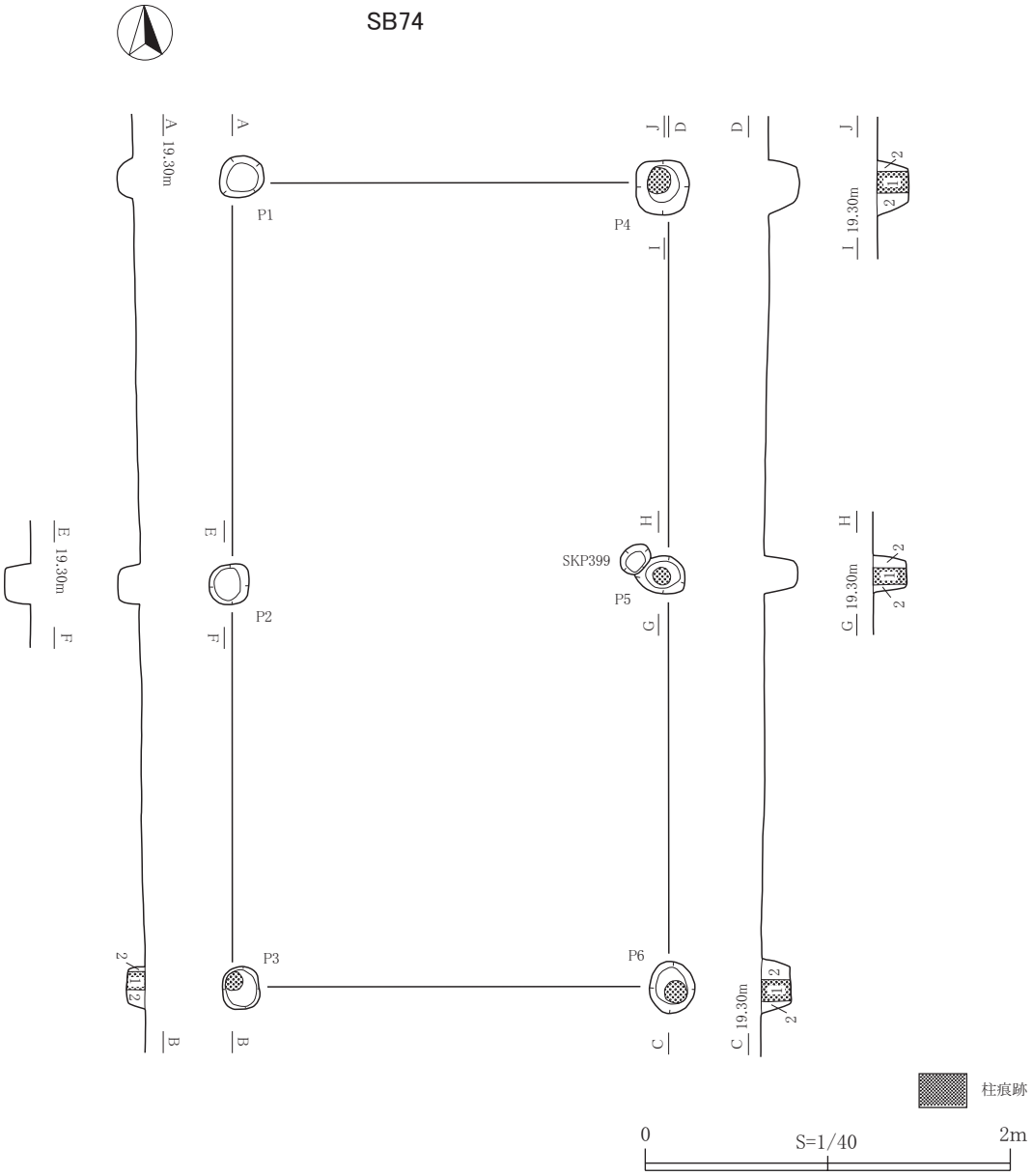
《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。



第11図　ＳＢ63

第４表　ＳＢ63柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	0.25	0.22	0.20	18.98	1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
Ｐ２	円　形	0.23	0.22	0.18	19.01	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、焼土粒状小2%、地山粒状小5%混入
Ｐ３	楕円形	0.24	0.18	0.16	19.02	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小～小2%、地山粒状小3%混入
Ｐ４	楕円形	0.34	0.30	0.25	18.95	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
Ｐ５	円　形	0.25	0.25	0.26	18.94	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入



第12図　ＳＢ74

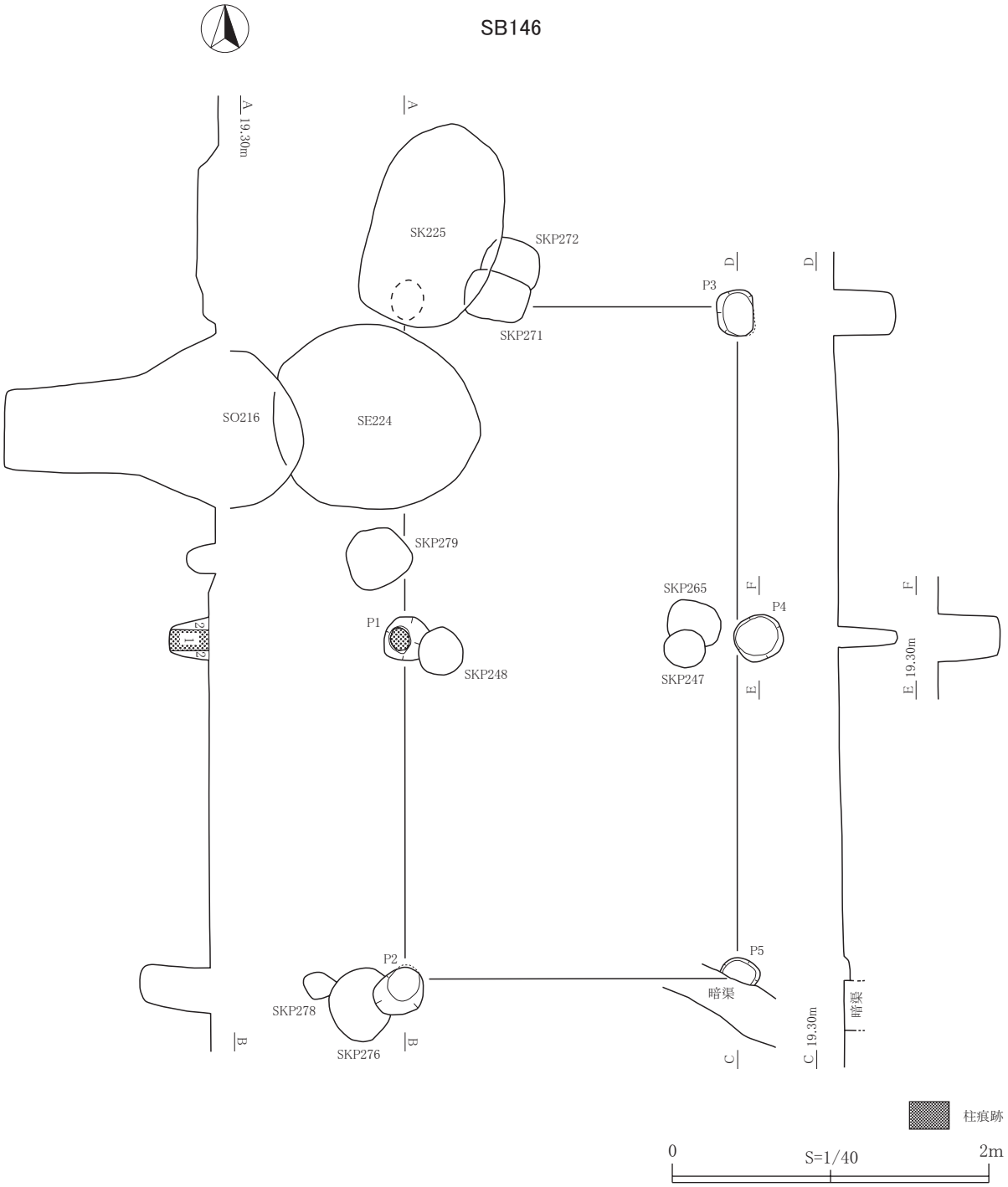
第５表　ＳＢ74柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	0.26	0.23	0.08	19.05	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小～中5%混入
Ｐ２	方　形	0.22	0.21	0.14	19.02	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小～大5%・塊状中5%混入
Ｐ３	楕円形	0.24	0.20	0.10	19.10	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小1%、地山粒状小3%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、焼土粒状小1%、地山粒状小～中5%混入
Ｐ４	方　形	0.30	0.29	0.17	19.01	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
						2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、焼土塊状大1%混入
Ｐ５	楕円形	(0.25)	0.21	0.18	19.02	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小～中3%混入
Ｐ６	楕円形	0.29	0.25	0.16	19.07	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、地山粒状小2%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小～大10%混入

※（　）内の数値は残存値である。

【ＳＢ146】（第13図、図版４-２）
《位置・確認》ＬＴ26・27に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複遺構》ＳＥ224、ＳＫ225、ＳＫＰ247・248・265・271・276・279と重複する。新旧は本遺構の方がＳＫ225、ＳＫＰ248より古く、ＳＫＰ276より新しいが、ＳＥ224、ＳＫＰ247・265・271・279との新旧関係は不明である。
《規模》桁行２間×梁行１間の南北棟の建物跡である。桁行の長さは東側柱列（Ｐ３－Ｐ５）4.26m、梁行の長さは南側柱列（Ｐ２－Ｐ５）2.10mである。建物方位はＮ－０°で磁北を指している。
《柱穴》５基検出された。平面形は楕円形と方形であり、大きさは長軸0.24～0.33m、短軸0.23～0.28mで、深さ0.04～0.39mである。柱痕跡を１基の柱穴で確認した。柱痕跡は径0.12mの円形である。個々の柱穴については第６表のとおりである。
《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。
【ＳＢ236】（第14図、図版４-３）
《位置・確認》ＭＡ27・28に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。西側は調査区外にかかっているため全容は把握できなかった。
《重複遺構》ＳＫ217・222、ＳＫＰ262・286と重複する。新旧は本遺構の方がＳＫ217より古く、ＳＫ222、ＳＫＰ262・286より新しい。
《規模》現状で確認できる範囲で桁行２間以上×梁行１間の東西棟の建物跡と考えられる。桁行の長さは北側柱列（Ｐ１－Ｐ３）3.30m以上であり、梁行の長さは北側柱列（Ｐ３－Ｐ４）2.10mである。建物方位はＮ－89°－Ｗである。
《柱穴》８基検出された。平面形は楕円形と方形であり、大きさは長軸0.27～0.38m、短軸0.28～0.32mで、深さ0.19～0.56mである。柱痕跡を３基の柱穴で確認した。柱痕跡は径0.09～0.12mの円形である。個々の柱穴については第７表のとおりである。
《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。

（２）柱穴列
【ＳＡ157】（第15図、図版４-４）
《位置・確認》ＬＴ24・25に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複遺構》ＳＫＰ156・472と重複する。新旧は本遺構の方がＳＫＰ156より古く、ＳＫＰ472より新しい。
《規模》長さ（北－南）4.41mで３基の柱穴から構成される。
《柱穴》平面形は円形と楕円形であり、大きさは長軸0.33～0.34m、短軸0.22～0.32m、深さ0.04～0.37mである。柱痕跡を１基の柱穴で確認した。柱痕跡は径0.19mの円形である。個々の柱穴については第８表のとおりである。
《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。

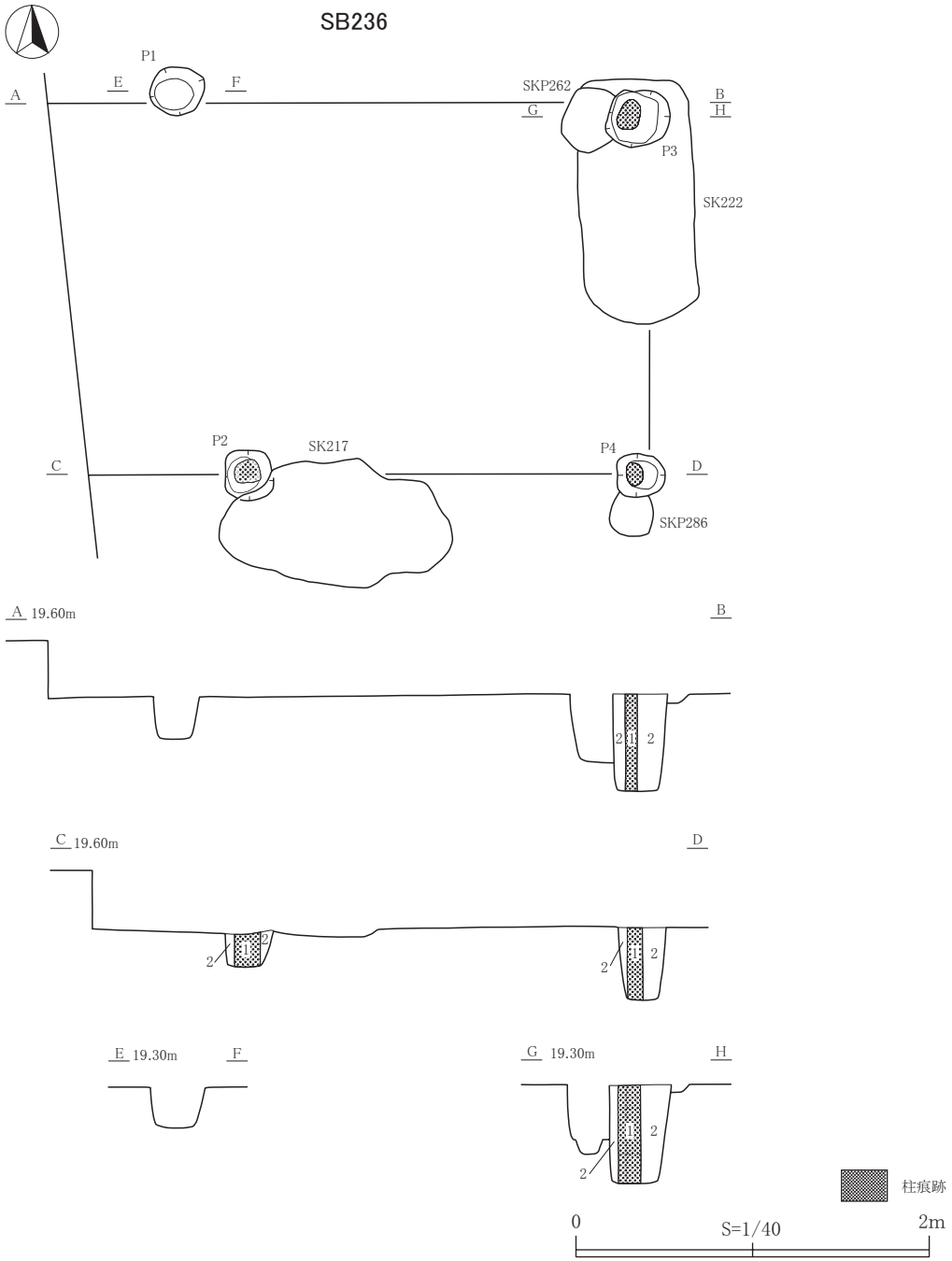


第13図　ＳＢ146

第６表　ＳＢ146柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	0.29	(0.23)	0.25	18.89	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状極小1%・塊状大1%、地山粒状小3%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ２	楕円形	0.33	0.28	0.45	18.70	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小～小2%、地山粒状小3%混入
Ｐ３	方　形	0.29	0.23	0.38	18.80	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小～小1%、地山粒状小5%混入
Ｐ４	楕円形	0.30	0.28	0.39	18.76	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
Ｐ５	(楕円形)	0.24	(0.14)	0.04	19.09	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入

※（　）内の平面形は推定で、数値は残存値である。

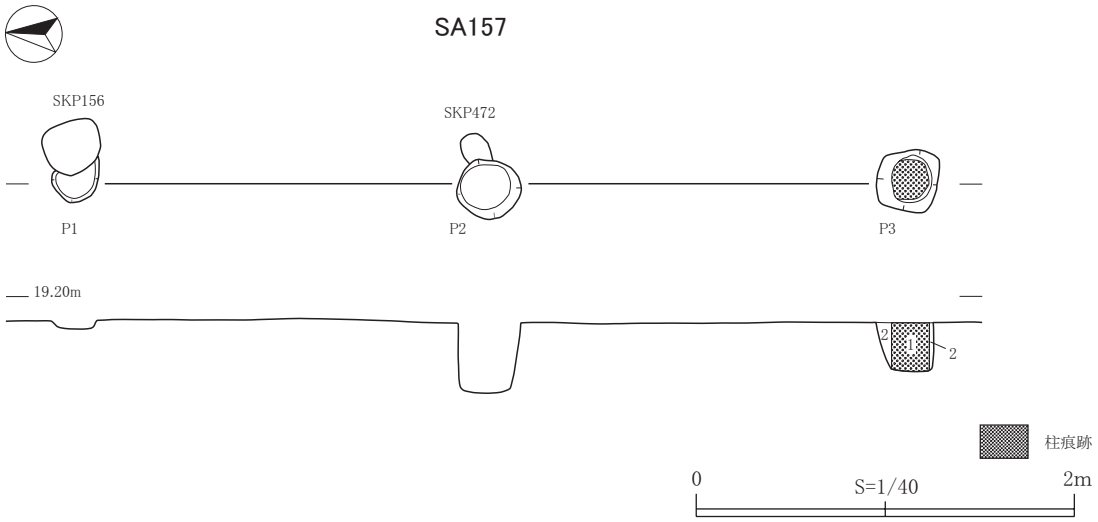


第14図　ＳＢ236

第７表　ＳＢ236柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	0.32	0.28	0.23	18.92	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小1%、地山粒状小2%混入
Ｐ２	方　形	(0.28)	(0.28)	0.19	18.93	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小～小2%、地山粒状小3%混入
						2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒状極小～小1%混入
Ｐ３	楕円形	0.38	0.32	0.56	18.60	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状小1%・塊状中2%、焼土粒状小1%、地山粒状中5%混入
						2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状小1%・塊状中3%、焼土粒状小1%、地山粒状中15%混入
Ｐ４	楕円形	0.27	0.24	0.41	18.74	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、地山粒状小2%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状小3%・塊状小3%、地山粒状小3%混入

※（　）内の数値は残存値である。



第15図　ＳＡ157

第８表　ＳＡ157柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	層位	土色	土性	備　考
		長軸	短軸	深さ					
Ｐ１	楕円形	(0.29)	0.22	0.04	19.03	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状小2%、地山粒状小3%混入
Ｐ２	円　形	0.34	0.32	0.37	18.69	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒状極小～小2%、地山粒状小3%混入
Ｐ３	方　形	0.33	0.32	0.26	18.80	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〔柱痕跡〕。炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
						2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状極小2%、地山粒状小5%混入

※（　）内の数値は残存値である。

（３）竪穴建物跡

【ＳＩ47】（第16図、図版４－５）

《位置・確認》ＬＴ30・31、ＭＡ30・31に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》ＳＫＰ435・436・495と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は隅丸方形である。規模は長軸（東－西）3.17m、短軸（北－南）3.01m、深さ0.14mである。南側に長さ0.57m、幅0.75mの出入り口が付属する。また、壁沿いに長さ0.64～2.46m、幅0.12～0.46m、深さ0.03～0.34mの掘り込みが溝状に断続的に巡る。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》11層に分けられた。

《柱穴》６基検出された。これらの平面形は楕円形または方形と円形を呈しており、大きさは長軸0.16～0.23m、短軸0.15～0.21m、深さ0.16～0.40mである。柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第９表のとおりである。

《出土遺物と遺構帰属時期》放射性年代測定から中世に帰属する。

【ＳＩ62】（第17図、図版４－６）

《位置・確認》ＬＳ33・34、ＬＴ33・34に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》ＳＫ477・487と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は隅丸方形である。規模は長軸（東－西）3.07m、短軸（北－南）2.70m、深さ0.07mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《柱穴》４基検出された。これらの平面形は楕円形を呈しており、大きさは長軸0.22～0.28m、短軸0.20～0.22m、深さ0.24～0.40mである。柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第10表のとおりである。

《堆積土》７層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》放射性年代測定から中世に帰属する。

【ＳＩ166】（第18図、図版４－７）

《位置・確認》ＬＳ25に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》ＳＫＰ488・489と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は隅丸方形である。規模は長軸（東－西）2.91m、短軸（北－南）2.73m、深さ0.10mである。南側に長さ0.23m、幅0.61mの出入り口が付属する。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《柱穴》６基検出された。これらの平面形は楕円形と円形を呈しており、大きさは長軸0.23～0.30m、短軸0.20～0.27m、深さ0.15～0.32mである。柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第11表のとおりである。

《堆積土》７層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》放射性年代測定から中世に帰属する。

【ＳＩ196】（第19図、図版４－８）

《位置・確認》ＬＲ24・25、ＬＳ24・25に位置する。第Ⅲ層上面で確認した。暗渠が南側を東西に横切っている。

《重複遺構》なし。

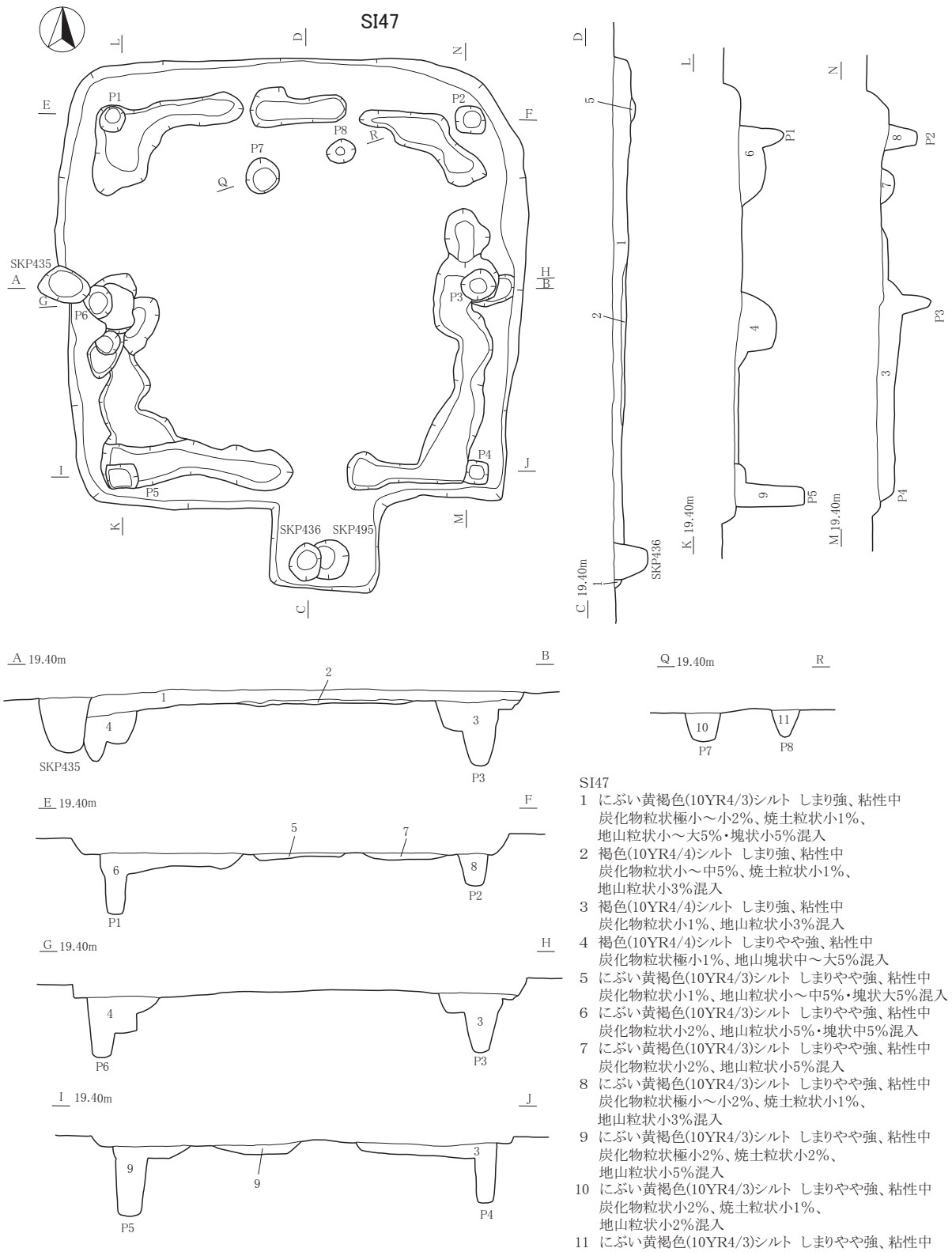
《平面形・規模》平面形は隅丸方形である。規模は長軸（東－西）2.48m、短軸（北－南）2.35m、確認面からの深さ0.13mである。東側に長さ0.19m、幅0.83mの出入り口が付属する。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《柱穴》４基検出された。これらの平面形は方形と楕円形を呈しており、大きさは長軸0.16～0.24m、短軸0.12～0.19m、深さ0.08～0.24mである。柱痕跡は認められなかった。個々の柱穴については第12表のとおりである。

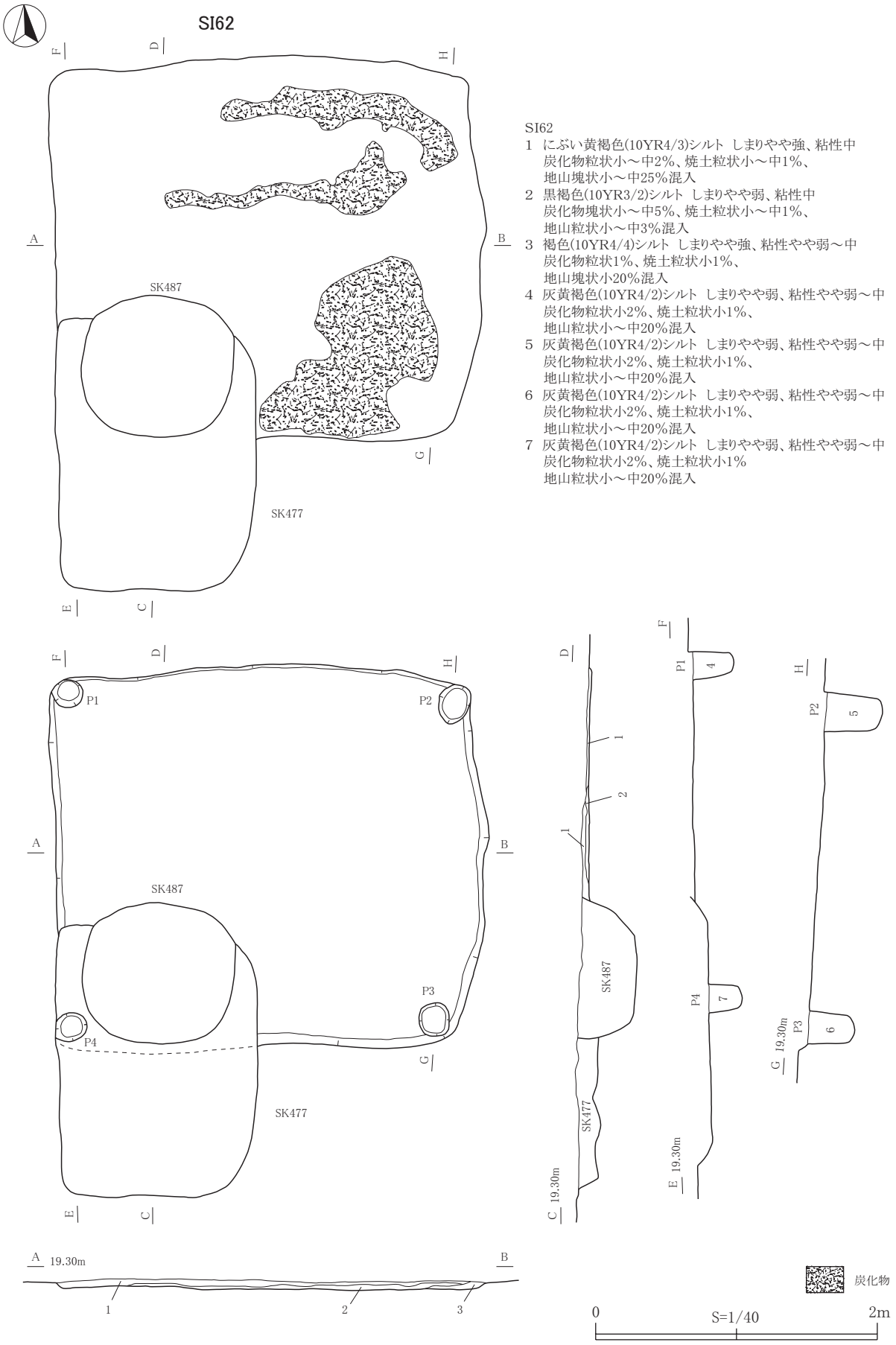
《堆積土》８層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》放射性年代測定から中世に帰属する。



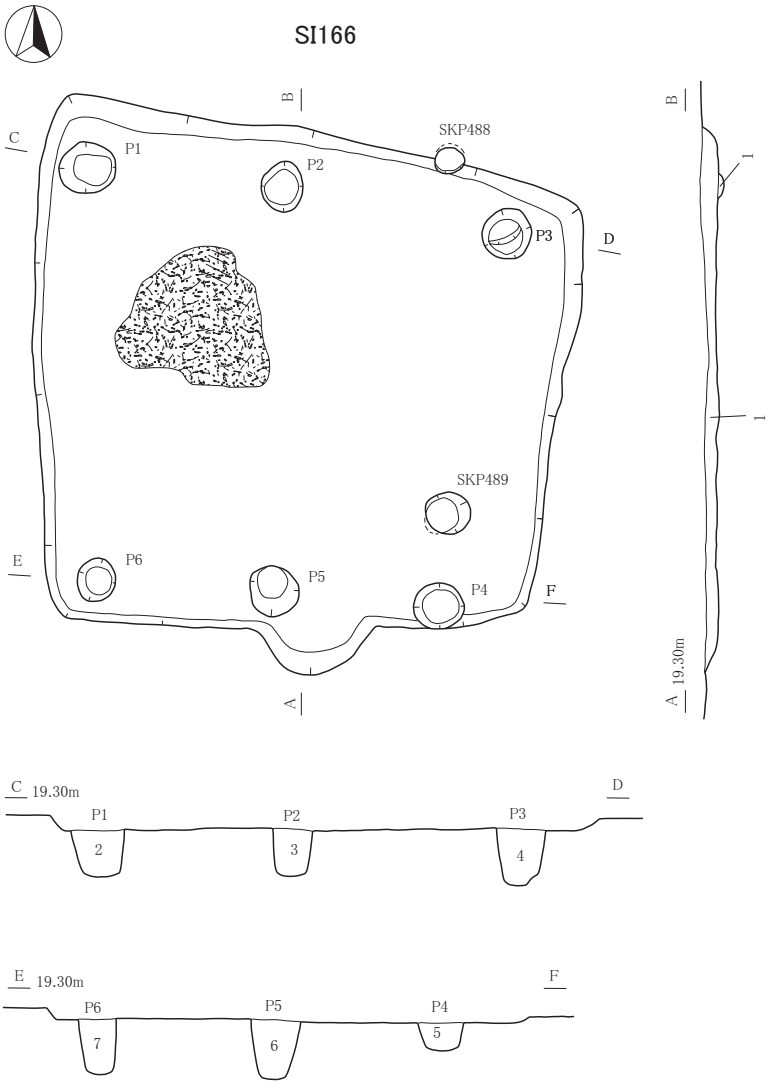
SI47
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小1%、
地山粒状小～大5%・塊状小5%混入
2 褐色(10YR4/4)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状小～中5%、焼土粒状小1%、
地山粒状小3%混入
3 褐色(10YR4/4)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状小1%、地山粒状小3%混入
4 褐色(10YR4/4)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状極小1%、地山塊状中～大5%混入
5 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小1%、地山粒状小～中5%・塊状大5%混入
6 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、地山粒状小5%・塊状中5%混入
7 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、地山粒状小5%混入
8 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小1%、
地山粒状小3%混入
9 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状極小2%、焼土粒状小2%、
地山粒状小5%混入
10 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%、
地山粒状小2%混入
11 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、焼土粒状小2%、
地山粒状小3%混入

第16図　ＳＩ47



SI62
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状小～中2%、焼土粒状小～中1%、
　地山塊状小～中25%混入
2　黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりやや弱、粘性中
　炭化物塊状小～中5%、焼土粒状小～中1%、
　地山粒状小～中3%混入
3　褐色(10YR4/4)シルト　しまりやや強、粘性やや弱～中
　炭化物粒状1%、焼土粒状小1%、
　地山塊状小20%混入
4　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまりやや弱、粘性やや弱～中
　炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小～中20%混入
5　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまりやや弱、粘性やや弱～中
　炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小～中20%混入
6　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまりやや弱、粘性やや弱～中
　炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小～中20%混入
7　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまりやや弱、粘性やや弱～中
　炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%
　地山粒状小～中20%混入

第17図　ＳＩ62



SI166

1 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状小～中2%・塊状小2%、地山粒状小3%混入

2 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小1%、地山粒状小～中5%混入

3 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%・塊状小2%、地山粒状小3%混入

4 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、地山粒状小3%混入

5 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、地山粒状小5%混入

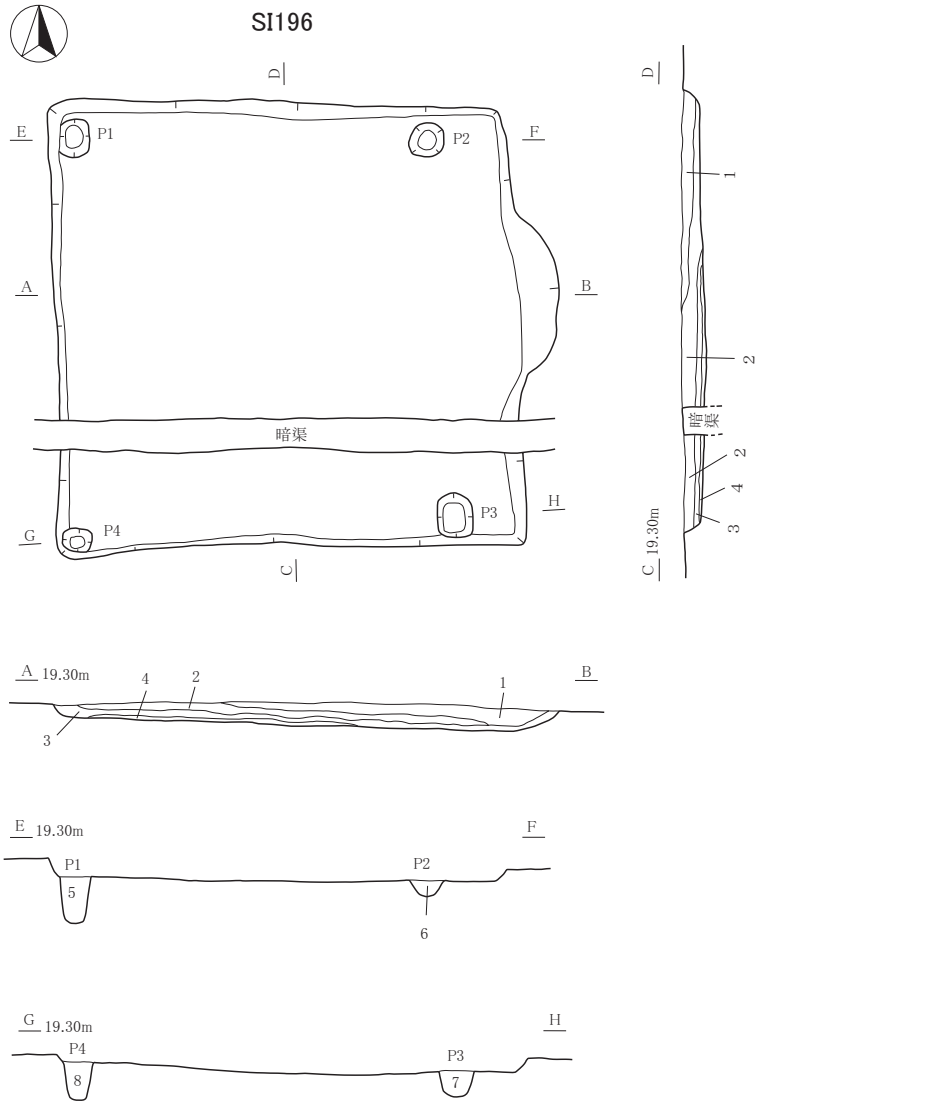
6 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状小2%、地山粒状小～中5%混入

7 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまりやや強、粘性中
炭化物粒状極小1%、地山粒状小5%混入

炭化物

0　S=1/40　2m

第18図　ＳＩ166



SI196
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状小2%、焼土粒状小1%
地山粒状小～中3%混入
2 暗褐色(10YR3/4)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状小～大5%・塊状小5%、焼土粒状小～中3%、
地山粒状小～大3%混入
3 褐色(10YR4/4)シルト しまりやや強～強、粘性中
炭化物粒状小～中2%、地山粒状小～中3%混入
4 暗褐色(10YR3/3)シルト しまりやや強～強、粘性中
炭化物粒状小1%、地山粒状小3%混入
5 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状極小2%、焼土粒状小1%、
地山粒状小～中3%混入
6 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状極小2%、焼土粒状小1%、
地山粒状小～中3%混入
7 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状極小2%、焼土粒状小1%、
地山粒状小～中3%混入
8 灰黄褐色(10YR4/2)シルト しまり強、粘性中
炭化物粒状小2%、地山粒状小3%混入

0　S=1/40　2m

第19図　ＳＩ196

第９表　ＳＩ47柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	備　考
		長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	円形	0.18	0.17	0.26	18.68	
Ｐ２	方形	0.20	0.18	0.22	18.87	
Ｐ３	楕円形	0.23	0.21	0.27	18.71	
Ｐ４	方形	0.16	0.15	0.40	18.75	
Ｐ５	方形	0.21	0.16	0.39	18.65	
Ｐ６	楕円形	0.22	(0.19)	0.16	18.68	SKP435と重複し本遺構が古い。
Ｐ７	楕円形	0.24	0.22	0.19	18.90	
Ｐ８	楕円形	0.19	0.16	0.18	18.92	

※（　）内の数値は残存値である。

第10表　ＳＩ62柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	備　考
		長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	楕円形	0.22	0.20	0.29	18.85	
Ｐ２	楕円形	0.28	0.22	0.40	18.74	
Ｐ３	楕円形	0.24	0.21	0.33	18.80	
Ｐ４	楕円形	0.23	0.20	0.24	18.84	ＳＫ447と重複し本遺構が古い。

第11表　ＳＩ166柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	備　考
		長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	楕円形	0.30	0.27	0.24	18.87	
Ｐ２	楕円形	0.27	0.22	0.25	18.89	
Ｐ３	円形	0.27	0.26	0.30	18.87	
Ｐ４	楕円形	0.27	0.24	0.15	18.96	
Ｐ５	円形	0.27	0.26	0.32	18.82	
Ｐ６	楕円形	0.23	0.20	0.29	18.84	

第12表　ＳＩ196柱穴一覧表

柱穴番号	平面形	大きさ〔m〕			底面標高〔m〕	備　考
		長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	方形	0.20	0.16	0.24	18.85	
Ｐ２	楕円形	0.20	0.18	0.08	18.99	
Ｐ３	方形	0.24	0.19	0.14	18.94	
Ｐ４	方形	0.16	0.12	0.20	18.92	

（４）井戸跡

【ＳＥ14】（第20図、図版５－１）

《位置・確認》ＬＳ34グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》ＳＫＰ486と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《平面形・規模》平面形はほぼ円形である。規模は長軸（北西－南東）0.98m、短軸（北東－南西）0.92m、深さ1.51mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面は平坦である。

《堆積土》２層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》１層から白磁片１点、須恵器系陶器片１点、２層から箸16点、曲物片10点、板材６点が出土した（うち５点を掲載した：第24図１～５、図版13-１～５）。遺物から遺構は中世に帰属する。

【ＳＥ22】（第20図、図版５－２）

《位置・確認》ＭＡ・ＭＢ34グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》ＳＢ18、ＳＫＰ396と重複する。新旧は本遺構の方がＳＫＰ396より新しいが、ＳＢ18との新旧関係は不明である。

《平面形・規模》平面形はほぼ円形である。規模は長軸（北東－南西）1.02m、短軸（北西－南東）0.90m、深さ1.75mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》７層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》７層から箸１点、棒状木製品２点が出土した（うち１点を掲載した：第24図６、図版13-６）。遺物から遺構は中世に帰属する。

【ＳＥ26】（第20図、図版５－３・４）

《位置・確認》ＬＲ・ＬＳ34グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形はほぼ円形である。規模は長軸（北東－南西）1.94m、短軸（北西－南東）1.91m、深さ1.69mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はやや鍋底状である。

《堆積土》５層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》３層から須恵器系陶器片１点、４層から須恵器系陶器片４点、石製品（温石）１点、５層から漆器（椀）２点、箸30点、棒状木製品２点、箆２点、曲物片108点、曲物の蓋か底２点、折敷１点、自在２点、杭１点、板材56点、その他部材４点が出土した（うち21点を掲載した：第24図７～９、第25図10～16、第26図17～21、第27図22、図版13-７～13、図版14-14～21、図版15-22～27）。また、水洗選別により種実類を採取した（図版32・33）。遺物から遺構は中世に帰属する。

【ＳＥ45】（第21図、図版５－５・６）

《位置・確認》ＬＳ・ＬＴ32グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形はほぼ円形である。規模は長軸（北東－南西）1.00m、短軸（北西－南東）

0.99m、深さ1.84mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》４層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》４層から漆器（皿）１点、箸97点、曲物片47点、斎串１点、棒状木製品４点、板材１点、その他部材１点が出土した（うち12点を掲載した：第27図23～34、図版16-28～39）。また、水洗選別により種実類を採取した（図版30・31・32・33）。遺物から遺構は中世に帰属する。

【ＳＥ93】（第21図、図版５－７）

《位置・確認》ＭＡ・ＭＢ29・30グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形はほぼ円形である。規模は長軸（北東－南西）0.80m、短軸（北西－南東）0.72m、深さ1.50mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》５層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》５層から須恵器系陶器片１点、箸２点、曲物片11点、板材２点が出土した（うち１点を掲載した：第28図35、図版16-40）。遺物から遺構は中世に帰属する。

【ＳＥ98】（第21図、図版５－８）

《位置・確認》ＬＳ・ＬＴ27グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

《重複遺構》ＳＫＰ99と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸（北東－南西）1.19m、短軸（北西－南東）0.92m、深さ1.12mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面は平坦である。

《堆積土》７層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》３層から銭貨３点、４層から須恵器系陶器片１点、６層から須恵系陶器片１点、７層から折敷１点、樽か桶の底板１点、板材１点が出土した（うち７点を掲載した：第28図36～40、図版41-46）。また、水洗選別により種実類を採取した（図版30・31・32・33）。遺物から遺構は中世に帰属する。

【ＳＥ164】（第22図、図版５－９）

《位置・確認》ＬＲ・ＬＳ26・27グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。暗渠が、遺構の中心部付近を東西に横切っている。

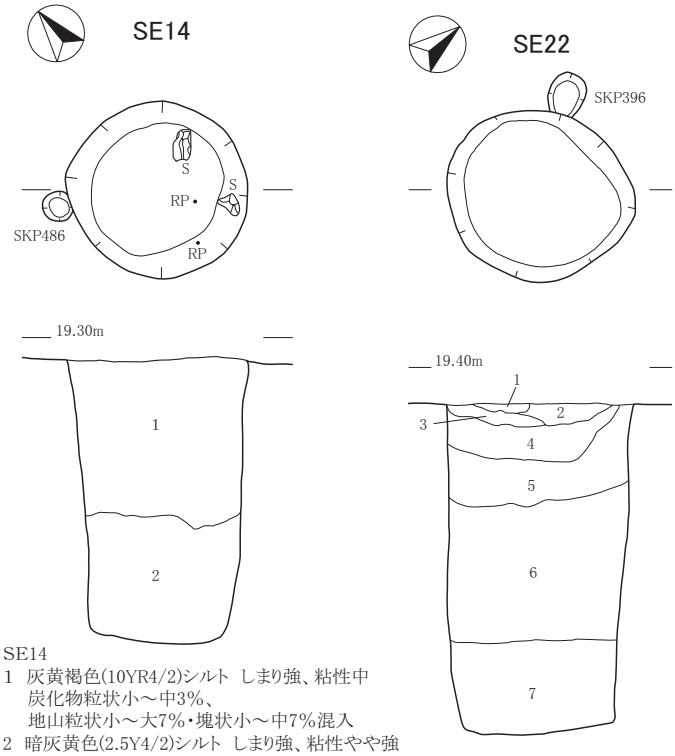
《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸（北西－南東）1.57m、短軸（北東－南西）1.31m、深さ1.73mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はやや鍋底状である。

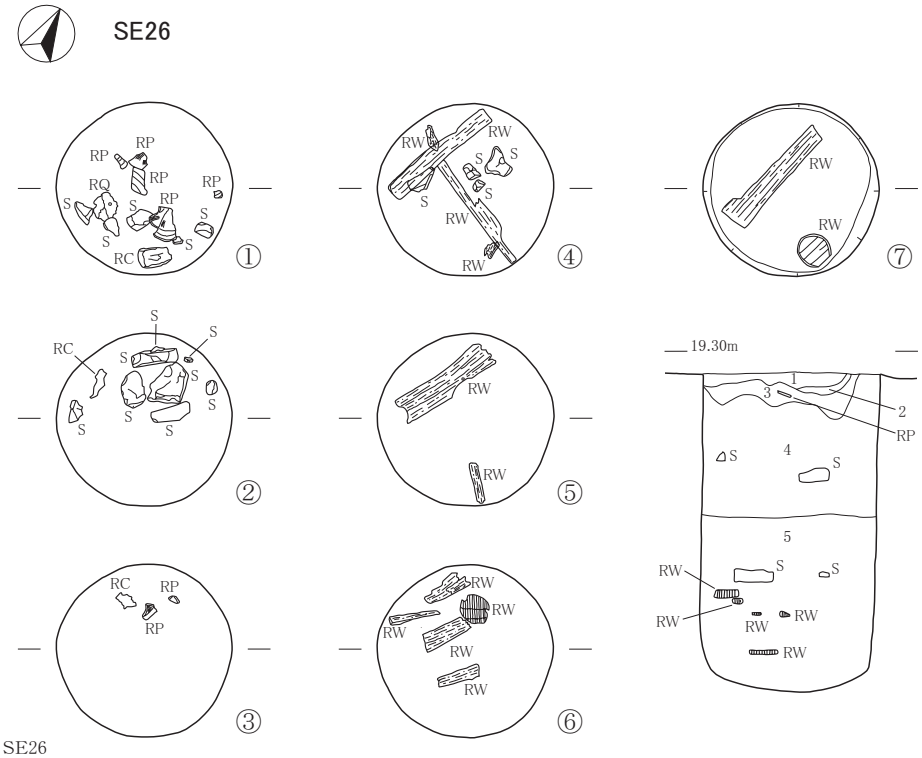
《堆積土》４層に分けられた。

《出土遺物と遺構帰属時期》４層から箸６点、樽か桶の底板１点、板材２点、その他材１点が出土した（うち１点を掲載した：第29図41、図版41-47）。また、水洗選別により種実類を採取した（図版30・32・33）。遺物から遺構は中世に帰属する。



SE14
1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状小～中3%、
　地山粒状小～大7%・塊状小～中7%混入
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト　しまり強、粘性やや強
　炭化物粒状小2%、地山粒状小1%混入

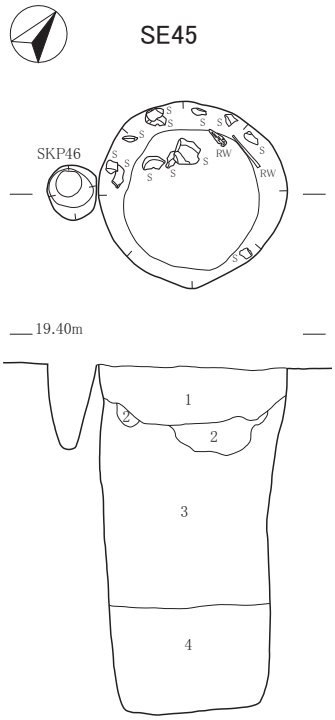
SE22
1　黒褐色(10YR3/2)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小～中5%、
　地山粒状小3%混入
2　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小～中3%、
　地山粒状小3%混入
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小1%・塊状中1%、
　地山粒状小3%混入
4　褐色(10YR4/4)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小～小1%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小3%混入
5　褐色(10YR4/6)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小1%、焼土粒状極小1%、
　地山粒状小3%混入
6　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状極小1%、
　地山粒状小～中3%混入
7　灰色(5Y4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状小～大2%、焼土塊状中1%混入

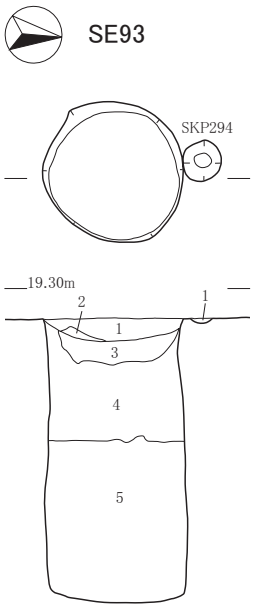


SE26
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小3%混入
2　黒色(10YR1.7/1)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状小3%・塊状小3%、灰黄褐色土小5%、
　地山粒状小1%混入
3　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状極小～小2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小3%混入
4　褐色(10YR4/4)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状極小1%、焼土粒状極小1%、
　地山粒状小～大5%・塊状中5%混入
5　暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　黒色土粒状小3%混入

0　S=1/40　2m

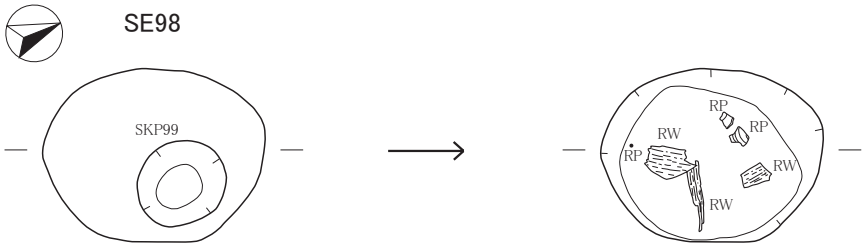
第20図　ＳＥ14・22・26



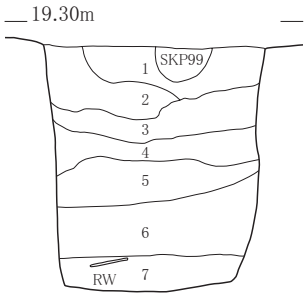


SE45
1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状小～中2%、焼土粒状極小1%、
　地山粒状小7%・塊状中7%混入
2　黒色(10YR1.7/1)シルト　しまりやや弱、粘性やや強
　焼土粒状小1%、地山粒状小3%混入
3　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状小1%、黒色土粒状小3%、
　地山粒状小～大5%・塊状小～中5%混入
4　灰色(5Y4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　オリーブ灰色土粒状小～大3%混入

SE93
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状極小1%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小3%混入
2　黒褐色(10YR3/2)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状極小1%、地山粒状小3%混入
3　黒褐色(10YR3/1)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状小～中7%・塊状中7%、焼土粒状極小～小2%、
　地山粒状小～中5%・塊状小5%混入
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小～小1%、焼土粒状極小1%、
　地山粒状小3%混入
5　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状中1%、黒色土粒状中2%
　オリーブ灰色土粒状大3%混入



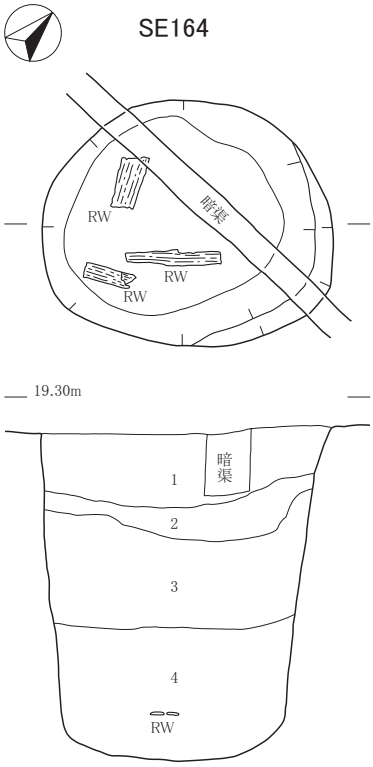
SE98
1　褐色(10YR4/4)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状小～中2%・塊状小2%、
　焼土粒状小1%、地山粒状小～中3%混入
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまりやや強、粘性中
　地山粒状小2%、炭化物粒状小～中2%、
　焼土塊状中1%混入
3　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり中、粘性中
　炭化物粒状小～中2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小～大3%混入
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまり中、粘性中
　炭化物粒状小1%、焼土塊状中1%、
　地山粒状小～大10%混入
5　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり中、粘性中
　炭化物粒状小～中2%、焼土粒状小～中5%、
　地山粒状小～中3%混入
6　黄灰色(2.5Y4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状小～大7%、地山粒状小～大5%混入
7　灰色(5Y4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　黒色土粒状大5%混入



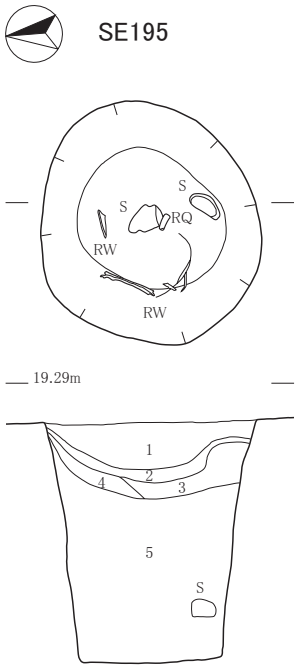
0　S=1/40　2m

第21図　ＳＥ45・93・98

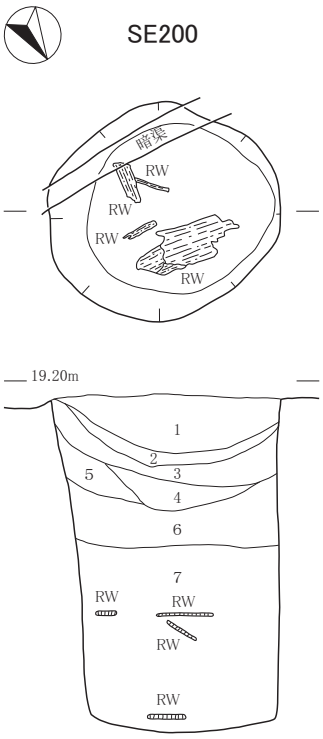
【ＳＥ195】（第22図、図版５-10・11）
《位置・確認》ＬＲ23グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複遺構》なし。
《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸（北東－南西）1.33ｍ、短軸（北西－南東）1.17ｍ、深さ1.28ｍである。
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面は平坦である。
《堆積土》５層に分けられた。
《出土遺物と遺構帰属時期》５層から箸５点、曲物片133点、曲物の底１点、板材２点、その他部材２点、石製品（砥石）１点が出土した（うち２点を掲載した：第29図42・43、図版41-48～50）。また、水洗選別により種実類を採取した（図版31・32・33）。遺物から遺構は中世に帰属する。
【ＳＥ200】（第22図、図版５-12）
《位置・確認》ＬＴ24グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。暗渠が、遺構の南側を東西に横切っている。
《重複遺構》なし。
《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸（北東－南西）1.25ｍ、短軸（北西－南東）1.09ｍ、深さ1.80ｍである。
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。
《堆積土》７層に分けられた。
《出土遺物と遺構帰属時期》７層から棒状木製品１点、板材10点が出土した（うち１点を掲載した：図版41-51）。また、水洗選別により種実類を採取した（図版31・32・33）。遺物から遺構は中世に帰属する。
【ＳＥ224】（第23図、図版５-13）
《位置・確認》ＬＴ・ＭＡ27グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複遺構》ＳＢ146、ＳＯ216と重複する。新旧は本遺構の方がＳＯ216より古いが、ＳＢ146との新旧関係は不明である。
《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸（北東－南西）1.33ｍ、短軸（北西－南東）1.20ｍ、深さ1.35ｍである。
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。
《堆積土》４層に分けられた。
《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。
【ＳＥ381】（第23図、図版５-14）
《位置・確認》ＬＴ33グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。
《重複遺構》ＳＫＰ438と重複する。新旧は本遺構の方が古い。
《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸（北東－南西）1.42ｍ、短軸（北西－南東）1.19ｍ、深さ1.23ｍである。
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面は平坦である。
《堆積土》２層に分けられた。



SE164
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状小～中2%、地山粒状小～中3%混入
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　しまりやや強、粘性中
　炭化物粒状極小1%、地山粒状極小1%混入
3　灰黄褐色(10YR5/2)シルト　しまり中、粘性中
　炭化物粒状小1%、地山粒状小3%混入
4　灰色(5Y4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状極小～小2%
　オリーブ灰色土粒状小～中3%混入



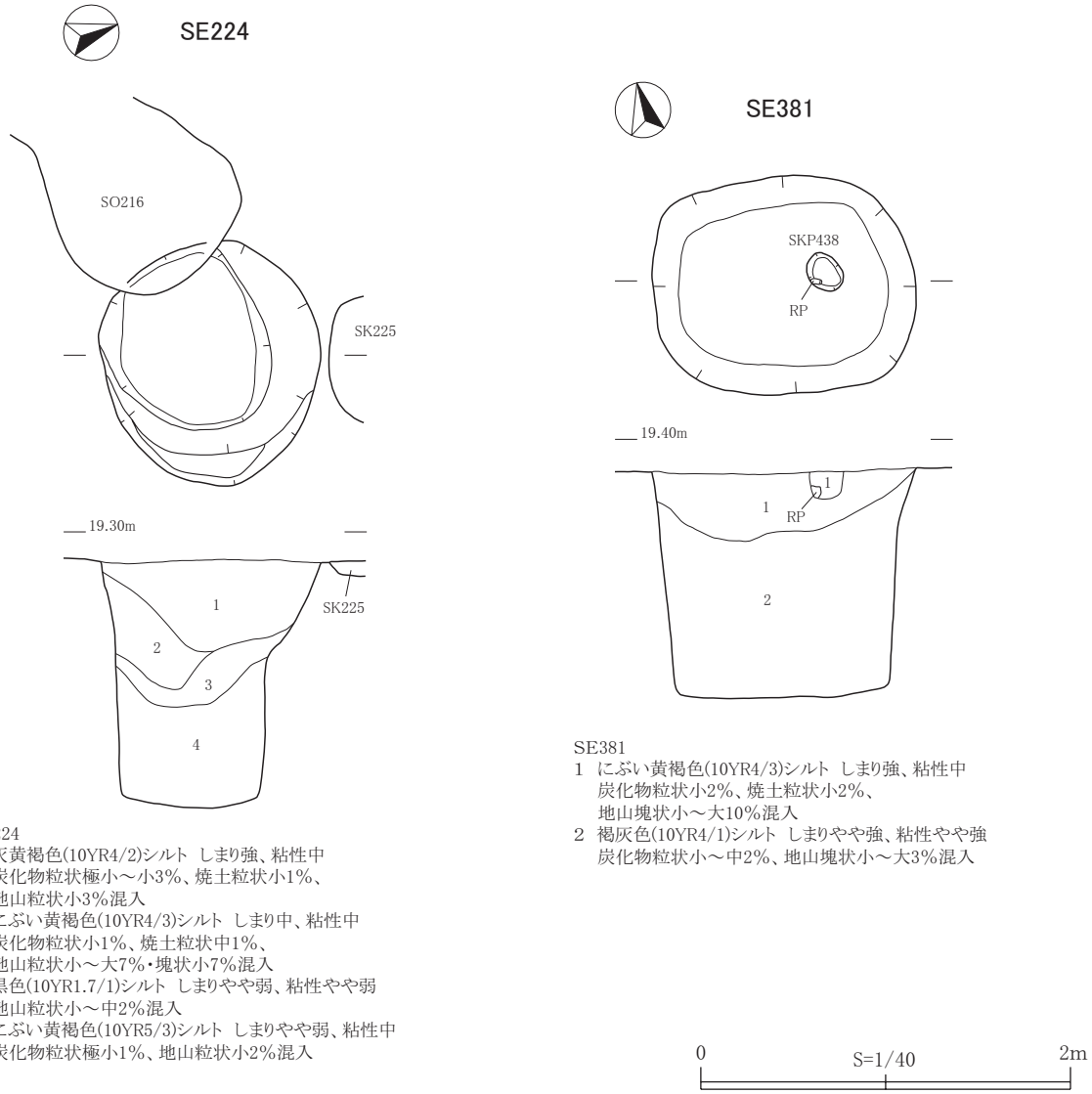
SE195
1　灰色(7.5Y4/1)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状小2%、地山粒状小2%混入
2　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状極小～小1%、灰色土塊状小～中3%、
　地山粒状小1%混入
3　灰色(10Y4/1)とオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト　しまり中、粘性強
　炭化物粒状極小1%、地山粒状小2%混入
4　灰色(10Y5/1)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状小1%、地山粒状小1%混入
5　灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト　しまり中、粘性強
　炭化物粒状小1%、地山粒状小2%混入



SE200
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状極小～中2%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小～大2%・塊状小2%混入
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状小1%、地山粒状小～大10%・塊状中10%混入
3　灰黄褐色(10YR5/2)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状極小2%、地山粒状小～大2%混入
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状極小1%、地山塊状中15%混入
5　灰色(7.5YR4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状小～中2%、地山粒状小2%混入
6　黄褐色(2.5Y5/3)シルト　しまり中、粘性やや強
　炭化物粒状極小1%混入
7　灰色(7.5Y4/1)シルト　しまり中、粘性やや強
　黒色土粒状小3%

0　S=1/40　2m

第22図　ＳＥ164・195・200

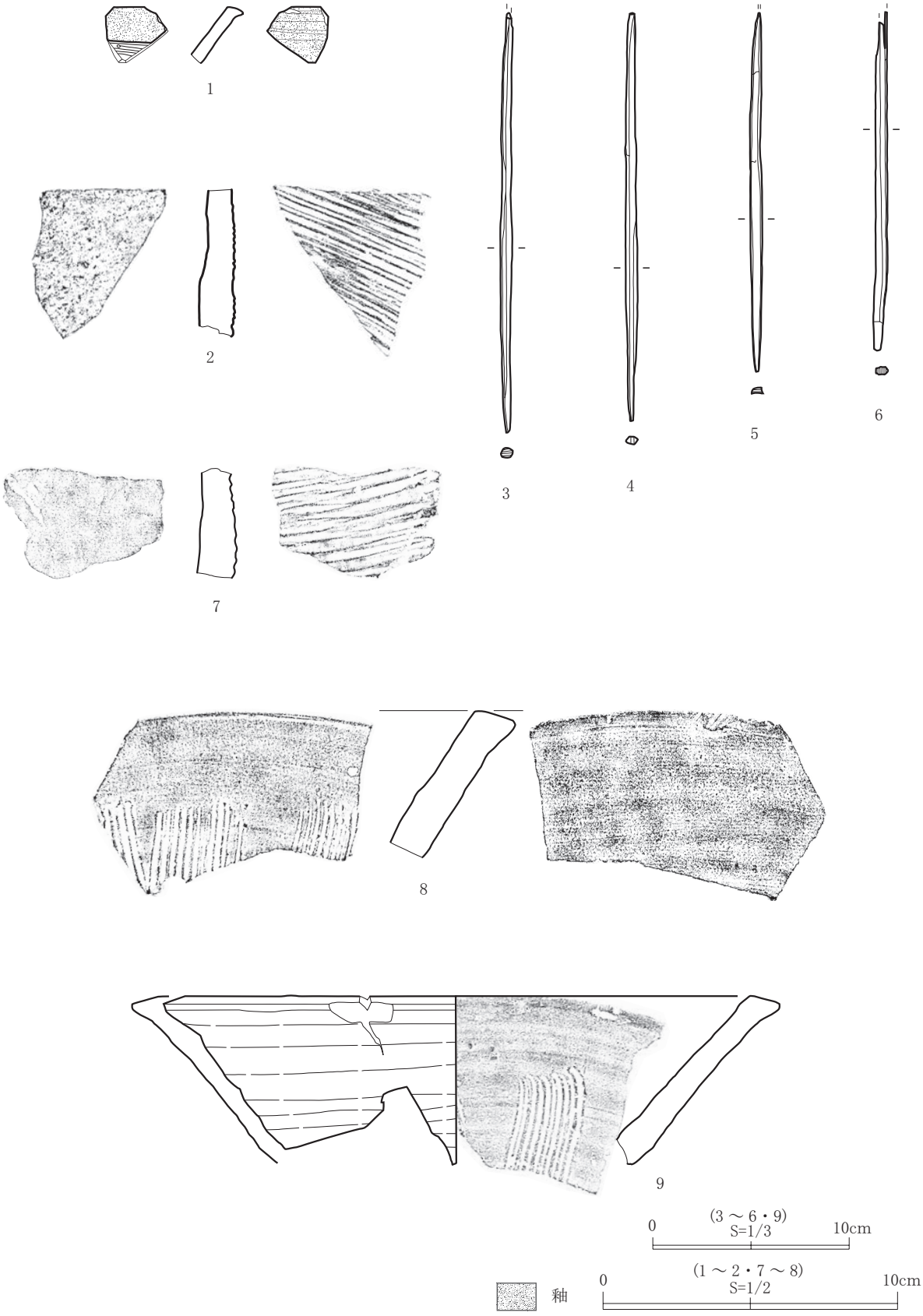


SE224
1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状極小～小3%、焼土粒状小1%、
　地山粒状小3%混入
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまり中、粘性中
　炭化物粒状小1%、焼土粒状中1%、
　地山粒状小～大7%・塊状小7%混入
3　黒色(10YR1.7/1)シルト　しまりやや弱、粘性やや弱
　地山粒状小～中2%混入
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト　しまりやや弱、粘性中
　炭化物粒状極小1%、地山粒状小2%混入

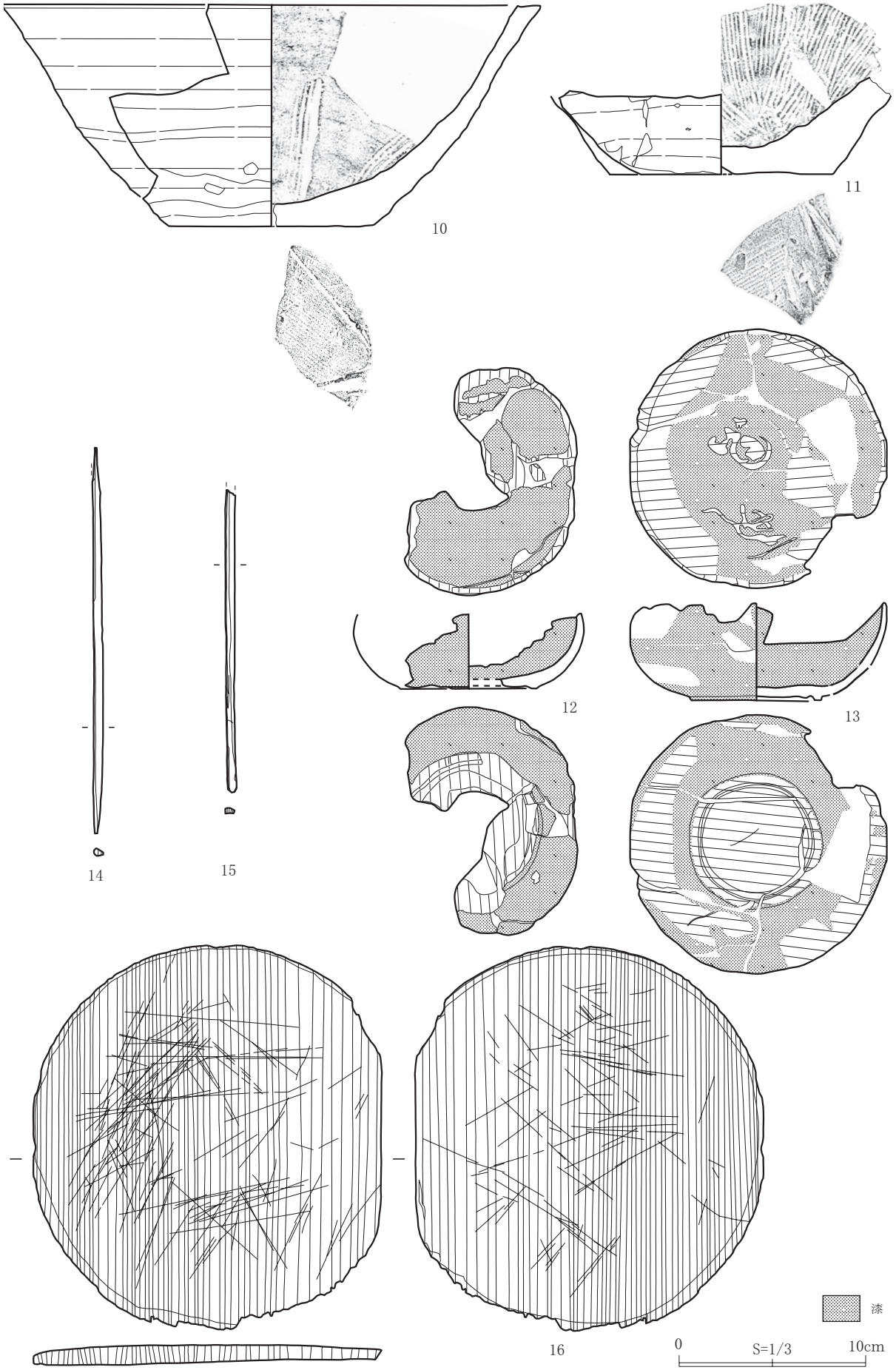
SE381
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト　しまり強、粘性中
　炭化物粒状小2%、焼土粒状小2%、
　地山塊状小～大10%混入
2　褐灰色(10YR4/1)シルト　しまりやや強、粘性やや強
　炭化物粒状小～中2%、地山塊状小～大3%混入

第23図　ＳＥ224・381

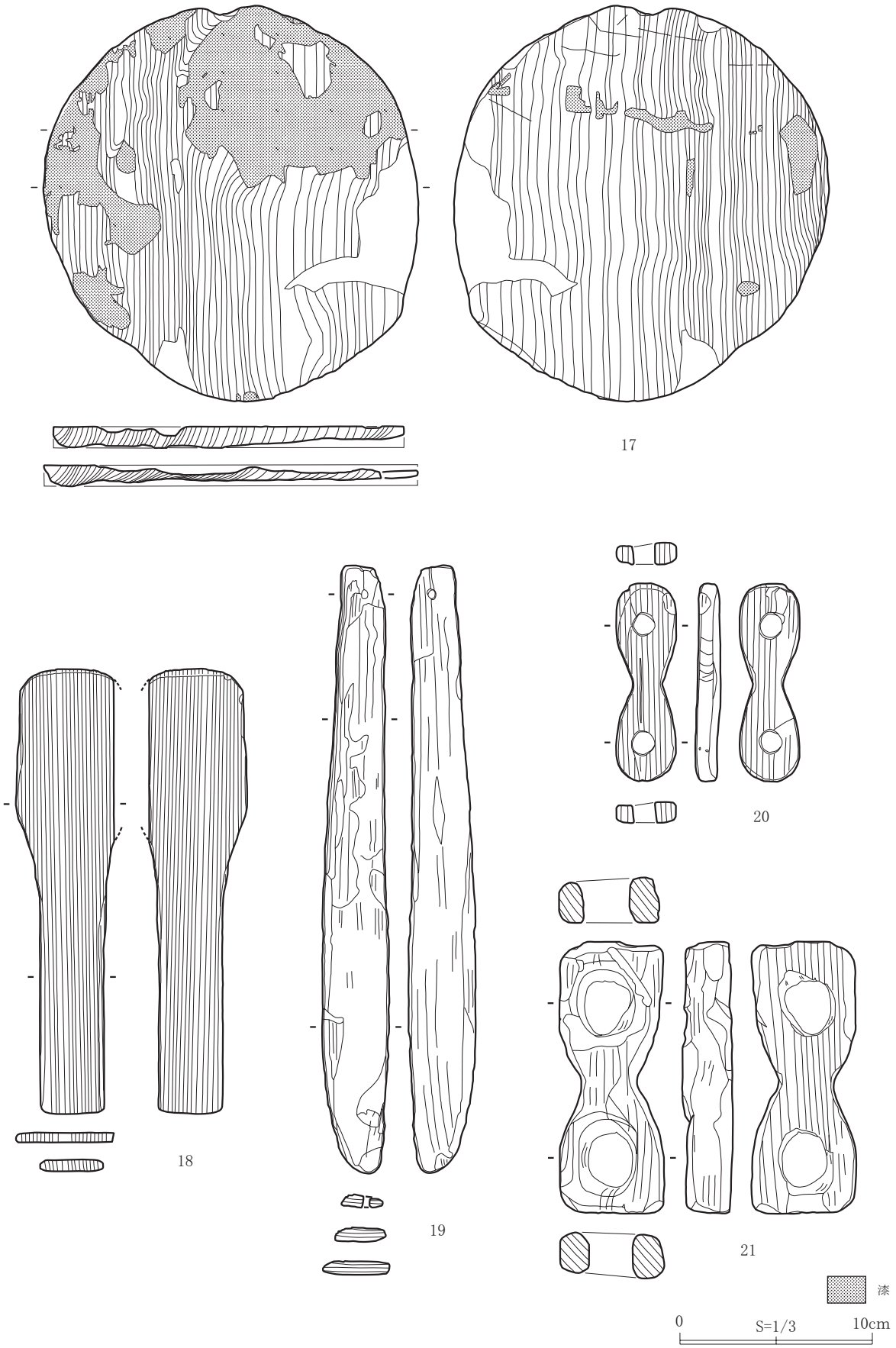
《出土遺物と遺構帰属時期》出土遺物はないが、周辺の状況から中世に帰属する遺構と判断する。



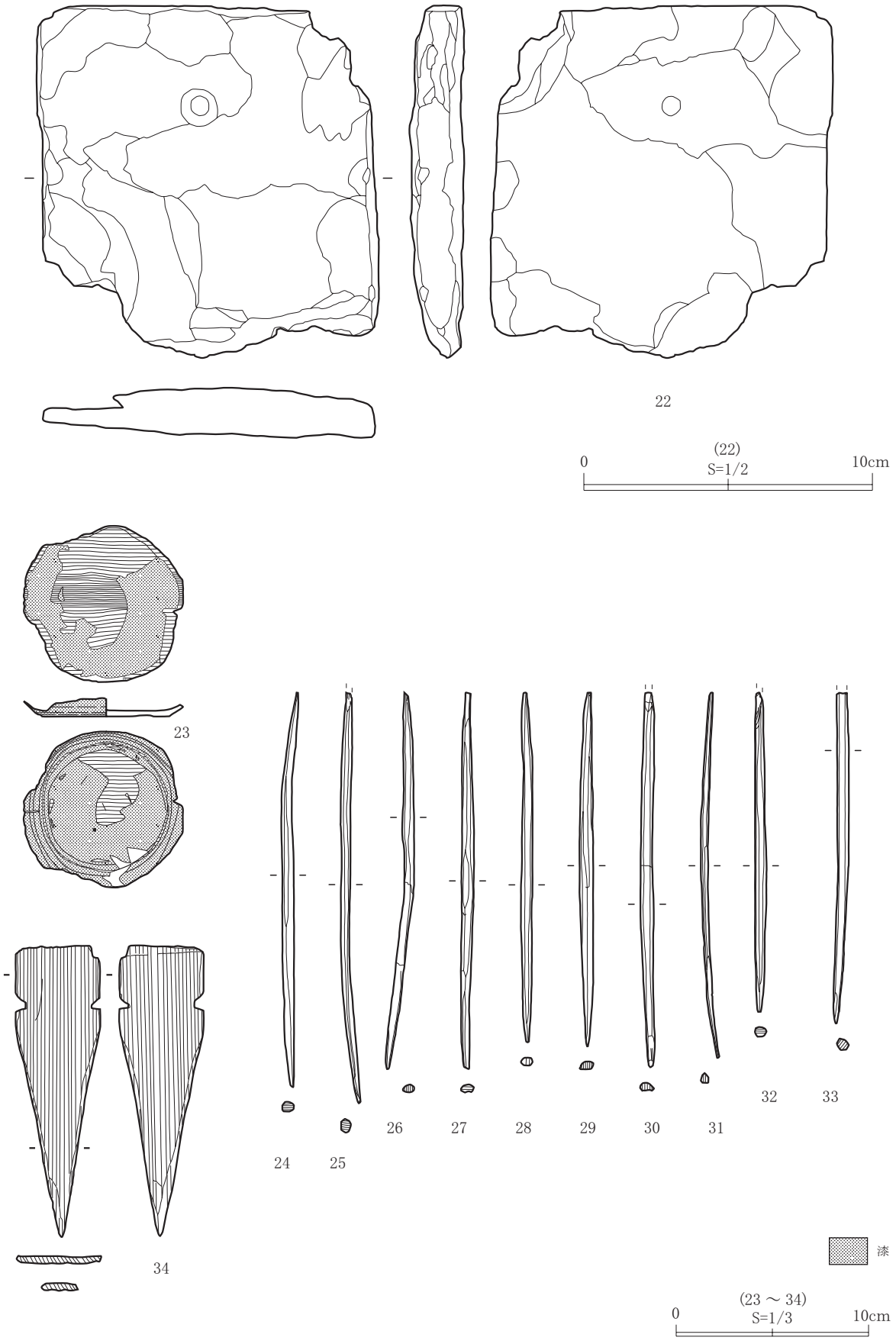
第24図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（１）



第25図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（２）



第26図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（３）



第27図　井戸跡出土遺物（Ａ区）（４）